

2012年10月15日

2012 年度
関西学院大学 総合政策学部
白山麓実習プロジェクト 夏季実習報告書

【作成者】

株式会社クロス クリエイティブ コア

代表取締役 野畠 章吾

(関西学院大学 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアム)

【報告書目次】

はじめに-----	P.3	
I. 2012 年度実習の目的、関係主体との連携、概要など		
1-1 2012 年度白山麓実習プロジェクトの目的-----	P.4	
1-2 関係主体紹介-----	P.4	
1-3 実習生の構成と指導および引率-----	P.5	
1-4 白山市観光推進部ジオパーク推進室との連携-----	P.5	
1-5 白山ろくテーマパークの受入態勢-----	P.8	
1-6 金沢庭材グループの協力態勢-----	P.9	
1-7 実習実施場所、宿泊場所-----	P.10	
1-8 実習行程-----	P.10	
II. 実習内容の報告（行程に沿って）		
2-1 9 月 4 日・火曜日（実習初日）「白山市入り」-----	P.13	
2-2 9 月 5 日・水曜日（実習二日目）「白山登山」-----	P.14	
2-3 9 月 6 日・木曜日（実習三日目）「白山からの下山、翌日以降の準備」-----	P.18	
2-4 9 月 7 日・金曜日（実習四日目） 「白山麓情報収集と白山ろくテーマパークでの報告会」-----	P.20	
2-5 9 月 8 日・土曜日（実習五日目） 「ワークショップ:『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』」-----	P.26	
2-6 9 月 9 日・日曜日（実習最終日）「帰阪」-----	P.40	
III. 白山麓実習プロジェクトの展望		
3-1 継続プロジェクト『関西の学生向け情報発信企画』の紹介-----	P.42	
3-2 三年間の軌跡から見るプロジェクトの理念-----	P.43	
3-3 今後の展望-----	P.44	
IV. 総括-----		P.45
おわりに ーゼミ実習としての白山麓プロジェクトの意義と意味ー -----		P.47
関西学院大学 総合政策学部教授 久野武		
謝辞-----		P.49
〔文末資料〕		

はじめに

ご支援を頂いている多くの皆様のお陰をもちまして、白山麓実習プロジェクトは、三年目の夏季実習を無事に終えることが出来ました。

振り返ると、石川県白山ろくテーマパーク（以下、白山ろくテーマパーク）の前指定管理者であった株式会社向川外樹園様より「地域貢献性のある自主事業を展開したい」というご相談を頂き、同時期に本学の久野武教授より「ゼミ生の実習先に相応しい場所はないか？」とのお話があったことが、このプロジェクトのはじまりでした。私なりに白山麓の現状を鑑み、「地域の拠点に育てるべき公園の管理に若い学生が汗を流せば、地元の皆様に歓迎されるのではないか」という漠然とした期待からこの実習はスタートしたのです。

とはいえ、公園管理のお手伝いだけでなく、何かしら実習の目玉に位置づけられるプログラムを設けたいと考え、「公園の利用効果向上に資する施策の提案」を実習生の課題としました。これに対し、実習生は文献やインターネットを使用し、全国の様々な都市公園を対象に、採用されているイベント、システムを調べ、これを白山ろくテーマパーク風にアレンジしよう取り組みました。当時は白山ろくテーマパークや白山麓の地域性、それに実習の全体像も捉え切れていませんでしたから、ドタバタ劇で準備を進めていたことが懐かしく思い出されます。こうして実習生も私自身も、不安の中で提案発表会を迎えることになったわけです。しかしながら、本番の発表はご出席の皆様に温かく見守って頂き、実習生は充実した時間を過ごすことが出来ました。その後、この『政策提案発表会』は、より双方向性のある議論が出来るように形を変えながら、今や実習の核と言えるプログラムに育ちました。一年目は20数人、二年目は30数人、三年目の今年は40人を超える地元の方にご出席頂いており、段々と認知度が高まっていることも嬉しく思っております。

また、二年目の夏季実習からは、自分たちの提案した施策を園内で実験導入し、その効果を検証しようという試みを開始しました。

昨年の『キッズすくすく園芸体験』は、地元の2～3歳程度の子供たちとその保護者を対象にした園芸福祉事業でした。内容は一般的な園芸体験でも、はじめて植物や土に触れる子ども達は興味津々で、お一人で育児をされる時間が長いお母様方には特に喜んで頂くことが出来ました。また、我々にとって嬉しい誤算となったのは、参加頂いたほとんどの保護者の方から学生と子供たちとの触れ合いを喜んで頂けたということです。これは園芸福祉事業としての直接的な成果ではありませんが、目新しい企画でなくても、学生中心で行うからこそ得られる成果があると確信することが出来ました。

そして三年目の今年、白山麓実習プロジェクトは、白山ろくテーマパークを含む『白山手取川ジオパーク』の構想推進に貢献すべく、自らの企画を導入させて頂くことになりました。『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』と銘打った当該企画は、白山市観光推進部ジオパーク推進室様、また同市白峰支所様の多大なるご支援、ご指導を得て実施に至りました。白山手取川ジオパークのPRと地域教育の実践を目標とし、この企画をどのように準備し、またいかなる課題を乗り越えて、どんな成果が得られたのか、本報告書で詳しくお伝えさせていただきます。

加えて今年からは、白山麓の情報を関西の学生に向けて発信するという新たな企画がスタートしました。これは白山麓への誘客を目標としつつも、「地元の皆様と関西の学生との交流によって白山麓の新しい可能性が見出せないか？」という問いに端を発し進めているものです。この企画は現在進行形ですので、中間報告として本報告書に記載致します。

さらには白山登山、『これからの白山麓実習プロジェクト』と称し白山ろくテーマパークで行った発表会も含め、2012年度白山麓実習プロジェクト夏季実習の全行程についてご報告致します。いささかボリュームがありますが、どうかお付き合い下さいますよう宜しくお願い申し上げます。

2012年10月15日
実習生引率 野島章吾

◆本報告書の本編（Ⅰ～Ⅳ）では、記述内容の誤解を避けるため、また実習生への評価の側面もごさいますので、敬語、謙譲語、丁寧語などの使用は可能な限り控えて参ります。また企業名は㈱表記とし、氏名については出来るだけ実習の雰囲気を想像頂けるよう「さん付け」と致します。ご了承下さい。

Ⅰ．2012 年度実習の目的、関係主体との連携、概要など

1-1 2012 年度白山麓実習プロジェクトの目的

以下、2012 年度白山麓実習プロジェクトの目的を述べる。¹

- i. 白山手取川ジオパーク構想のPRならびに白山麓における地域教育の実践を目的として、現地にてジオパーク・ワークショップ（『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』）を企画、実施する。
- ii. 白山手取川ジオパークの目玉である白山に登山し、ジオスポットをはじめとする当地の自然環境を学ぶ。
- iii. 白山麓の誘客に寄与するため、関西の大学生をターゲットとした情報発信活動ならびに交流Webサイト構築に挑戦する。（実習中は情報収集、実習後に情報発信）
- iv. 過去二年間の実習で培った石川県白山ろくテーマパークのスタッフ他周辺住民の皆さんとの“絆”を大切にし、当該公園でボランティア活動を行う。また、次年度の実習課題を「当該公園におけるジオパーク構想への貢献方法とその企画」と仮定し、その方向性を探る。
- v. 実習生各々の卒業論文研究、進級論文研究などのフィールドワークとして実習を活用する。
- vi. 白山市観光推進部ジオパーク推進室、白山ろくテーマパーク指定管理者、本実習の協力企業である金沢庭材グループ、地元住民の皆さん、その他複数の関係主体と連携して実習を行うことにより、実習生一人一人が白山麓の活性化を担うという当事者意識を持ち、実社会における現場感覚を養う。

1-2 関係主体紹介

実習生：関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミおよび同学部有志

受入：白山市観光推進部ジオパーク推進室

白山市白峰支所

石川県土木部公園緑地課

石川県土木部 石川土木総合事務所

石川県白山ろくテーマパーク指定管理者 ㈱岸グリーンサービス

協力：金沢庭材㈱

㈱クロス クリエイティブ コア

※今季実習は、ジオパーク推進室はじめ白山市の複数の部署で受入態勢が整えられた。

¹ 『2012 年度白山麓実習プロジェクトの手引き』（筆者作成）より抜粋編集。

1-3 実習生の構成と指導および引率

4 回生	上野紗恵	研究発表会責任者
同上	大隅冴子	ワークショップ ² チーム実行リーダー
同上	河内泉希	実習生代表
同上	小前愛	白山麓情報発信チームリーダー
同上	田中志帆	プロジェクト発展検討リーダー ³
同上	常盤明日美	ワークショップチーム企画リーダー
同上	渡部寛之	実習生副代表
3 回生	岡本紋奈	白山麓情報発信チーム
同上	上林真弓	ワークショップチーム兼 2,3 回生リーダー
同上	武本千枝	ワークショップチーム
2 回生	松岡佳恵	白山麓情報発信チーム
(上記、学年・五十音順に表記)		
<以上、実習生 11 名>		

指導：関西学院大学 総合政策学部教授 久野武
指導・引率：㈱クロス クリエイティブ コア 代表取締役 野島章吾
(関西学院大学 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアム⁴所属)

1-4 白山市観光推進部ジオパーク推進室との連携

2011 年度実習時の石川土木総合事務所からのアドバイス

今年度の実習の目玉は、白山手取川ジオパーク構想推進にかかるワークショップを実施することである。これは、昨年 2011 年度の実習中に石川土木総合事務所（石川県）の職員より「白山手取川ジオパーク構想を盛り上げる企画を学生から提案して欲しい」という発言があったため、これ以降、当時 3 回生（現 4 回生）の実習生は、ワークショップという形での実現を目指した。ワークショップと一口に言っても内容は様々であるが、

- ① 子供を対象とし地域教育を実践すること
- ② 有力な地元紙である北國新聞、北陸中日新聞をはじめとした地元メディアに告知、取材を要請し、白山手取川ジオパークの PR に資すること

という二つのコンセプトは、今年度初めまでに実習生間のコンセンサスが得られていた。

そこで、第一に白山市観光推進部ジオパーク推進室との連携を図るべく活動を開始した。

白山市観光推進部ジオパーク推進室（以下、ジオパーク推進室）との第一回打合せ（4 月 17 日）

筆者がはじめて白山市観光推進部ジオパーク推進室を訪れたのは、本年 4 月 17 日のことである。白山市役所本庁 3 階のジオパーク推進室を訪れると、まず同室主事の日比野剛さんより担当の挨拶があった。この日の打合せでは、同室次長の徳井孝一さんも交え、主に

²ワークショップとは、『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』を指す。
³プロジェクト発展検討リーダーは、新人募集を中心とした来年度以降の基盤作りを担当している。

⁴関西学院大学 総合政策研究科主催の研究機構。企業、研究所をはじめ、官公庁、その他の機関等と研究協力を促進し、人的交流を図るための組織（リサーチ・コンソーシアム＜産官学研究協力機構＞。関西学院大学 総合政策学部 Web サイトより。

<http://www.kg-sps.jp/gps/index.php> 2012.10.29 閲覧

筆者より「実習の趣旨」「実施予定日、実施場所」「今季実習の学生のイメージ」「過去二年間の実習の内容」⁵⁾について話し、改めて実習受入を要請した。これに対し推進室より快諾を頂いた他、日程や内容についても大筋で合意した。また、次回の打合せを実習生の下見と合わせて行うことを確認し散会となった。引率者としては実習受入が正式に決まるまでは緊張感があるが、第一関門を通過し安堵した。

実習生下見・ジオパーク推進室との第二回打合せ（5月30日）

5月30日が実習生の下見となった。参加した実習生4名（大隅・小前・田中・渡部）と筆者は、前日の夕方白峰入りし現地で一泊、翌朝30日に白山市白峰支所（以下、白峰支所）を訪れた。

白峰支所では日比野さんと白峰支所産業建設課主査の山口昭恵さん（ジオパーク推進室の山口室長との混同を避けるため以降も氏名で記述する）に対応して頂いた。ここでは、5月25日に関西学院大学 上が原キャンパスで行われたリサーチ・コンソーシアム総会記念事業ポスターセッション⁶⁾に出展したポスター⁷⁾を使用し、実習の目玉とする白山手取川ジオパーク構想推進にかかるワークショップの内容について協議した。その中で、実習生の案に対し白山市側から全体的にボリュームを増やすよう助言がある。これにより、

- ① 対象学年は小学4年生とし、募集対象は小学生全学年とする。また保護者は任意で参加可能。募集は白山市広報誌を中心に行う。
- ② ワークショップは昼食を挟んで実施する。昼食の手配は日比野さんが行う。（昼食代500円を徴収）
- ③ 午前中、白峰地区内においてクイズラリーを実施する。
- ④ 午後、参加者全員（小学生・保護者）と実習生が共同で白山手取川ジオパークのPRポスターを作製する。

の4点が確定した。また、ワークショップの実施場所は、複数あった候補（恐竜パークや白峰支所など）の中から、石川県白山ろく民俗資料館（以下、白山ろく民俗資料館）に定まった。先方との打合せは必要であるが、石川県指定有形文化財の中でイベントを行える機会は貴重であるし、ワークショップの狙いである地域教育の実践という面からも、ここに白山市内の小学生を招くことには意義があると考えた。なお、白山ろく民俗資料館との打合せについては日比野さんに担当頂いた。

その他、ワークショップを含めた実習の準備、運営の全般について、ジオパーク推進室、実習生、ならびに関係主体それぞれの役割分担を確認した。（図1）。

⁵⁾ 『打合せ資料 2012年3月26日 2012年度白山麓実習第一次案』（筆者作成）参照。

⁶⁾ 関西学院大学 総合政策研究科（大学院）と同日リサーチ・コンソーシアム（産官民学研協力機構）が年一度開催している研究発表会。

⁷⁾ 本報告書末尾に掲載。ポスター『白山麓における久野ゼミ実習の変遷と今後の展望』。

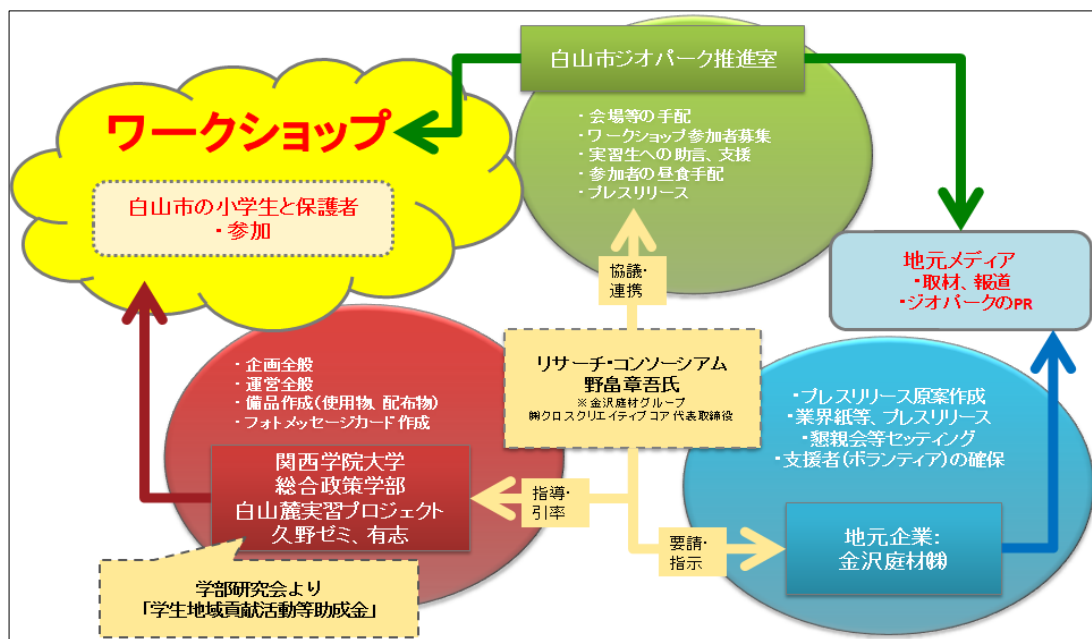


図1 2012年度白山麓実習の役割分担⁸

さらにワークショップとは別の企画として、白山麓の情報を関西の学生に向けて発信する Web サイトの設立が議題に上がった。白山市は観光推進 Web サイトを開設しているが、誘客対象を「関西の学生」に絞り込んだ新しい Web サイトを構築しようというものである。これは、

①実習生が同じ関西の学生の要望を掴み、Web サイトでの誘客効果の向上を図る。

②白山麓と学生との交流の中で、地域の新しい魅力を創造する。

ことを目的として企画し、最終的には我々の「白山麓実習プロジェクト」のような活動を新たに誕生させることを目指すものである。この日の打合せでは、主にコンセプトについての認識を共有、今後の準備スケジュールを確認した。

打合せの後、白峰支所を出発、日比野さんの案内のもと、白峰地区内、白山ろく民俗資料館、白山市白峰化石調査センター（以下、白峰化石調査センター）を巡り、地域の文化や自然について勉強した。特に一般開放されていない白峰化石調査センターを訪れた際には、昨年まで同センターの化石調査員であった日比野さんから複数の珍しい化石についてレクチャーを頂いた。実習生にとって有意義な下見となった。



白峰地区、山岸家の石垣の説明を受ける



白峰化石調査センターにて

⁸ 2012年度関西学院大学総合政策学部 リサーチ・フェア資料（大隅作）より抜粋。

ジオパーク推進室との第三回打合せ（8月13日）

実習前の最後の打合せとなった。内容は、

- ①参加者募集の進捗と今後の対応
- ②地元メディアへのプレスリリースの段取り
- ③クイズ内容またワークショップ時使用の備品の確認
- ④ワークショップ終了後の懇親会の参加者、準備など

である。日比野さんと筆者で、白山市役所本庁3階にて行った。

参加者募集について日比野さんより経過報告があり、既に白山市広報誌において、ワークショップ名を『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』（ジオパーク推進室と実習生がメールで協議）として宣伝した他、ジオパーク推進室が市内の公共施設にチラシを配布、掲載を依頼済みとのことであった。

ワークショップに関するプレスリリースの件は、特に石川県内への発信力がある北國新聞と北陸中日新聞への掲載を中心に検討した。結果、プレスリリースの原案は筆者が作成し、上記二紙には日比野さんから、また業界紙の北陸建設工業新聞には筆者からプレスリリースを行うこととした。

なお、日比野さんから指摘されたクイズ内容の訂正点については実習生に伝達し、懇親会の件は白山市サイドと実習生サイドの人数調整を行うとともに、準備全般は白山麓実習プロジェクトの協力企業である金沢庭材㈱が行うことを確認した。

実習期間中のジオパーク推進室との連携については、Ⅱ.の中で報告する。

1-5 白山ろくテーマパークの受入態勢

白山ろくテーマパークとの第一回打合せ（6月1日）

今年度から㈱岸グリーンサービスが白山ろくテーマパークの指定管理者になった。過去の実習を通して関係を築いてきた㈱向川外樹園が指定管理者ではなくなったことで、当初は白山ろくテーマパークを実習の拠点にするのは難しいと予想していた。前指定管理者曰く、新しい指定管理者に白山麓実習を引き継いで貰えるよう要請するとのことであったから、とりあえずは連絡を待つこととしていたが4月を過ぎても便りが無い。これはいよいよ白山ろくテーマパークでの実習は不可能かと諦めていた頃、㈱岸グリーンサービスの宮腰和美さんより直接筆者の携帯電話に連絡があった。「今年も白山ろくテーマパークで実習をして欲しい」とのことだった。安心はしたものの、この時点ではジオパーク推進室と実習全般の計画を立てていたため、白山ろくテーマパークで実習を行うには既に計画変更が必要になっていた。この旨を宮腰さんに伝えたところ、電話口から大変残念そうな印象が伝わってきたことを覚えている。「これは何としてもスケジュールを調整してテーマパークにも行かなければ…」、これが電話後の筆者の率直な思いであり、以後、ジオパーク推進室と協議し、9月7日の終日を白山ろくテーマパークでの実習に割り当てることとした。

宮腰さんからの電話は、実習の誘いを受けた他にも二つの嬉しい内容が含まれていた。一つは、前指定管理者時代から公園所長であった中村一彦さんが現指定管理者の下でも公園所長として変わらず勤務されているということ、もう一つは、実習生の来訪を公園周辺の地元の皆さんが楽しみにしているという話があったことである。中村さんは過去二年間の実習の趣旨などに十分な理解があり、幾度となく実習生を励まして頂いた経緯がある。また、実習受入を望む声が地元から上がったことは、地元住民と実習生との過去の交流の賜物であり、指定管理者が変わった今年度においては特に大きな意味を持つ。

6月1日の第一回打合せは、宮腰氏さんと中村さん、筆者が白山ろくテーマパーク公園センターに会し、挨拶をはじめ上記につき協議した。

白山ろくテーマパークとの第二回打合せ（8月13日）

宮腰さんと中村さん、筆者の三名で打合せを実施した。主な内容は、9月7日に行う報告会『白山麓実習プロジェクトのこれから』についてである。出席予定人数などを調整、また石川土木総合事務所やジオパーク推進室の意向について確認を行った。計画については概ね確定させられたが、報告会、その後の懇親会とも出席人数は未知数。これについては例年も同じであるため、とりあえず初年度と同じ 25 人程度と予測し準備することとした。また筆者より報告会は昨年までの教室形式ではなく、出来るだけ座談会形式で行い、実習生と出席者による双方向性のある議論を展開したい旨を伝え、了承を得た。

なお、懇親会のセッティングについては過去の実習と同様に、指定管理者側で行って頂けることとなった。

実習期間中の白山ろくテーマパークでの活動については、Ⅱ. の中で報告する。

1-6 金沢庭材グループの協力態勢

金沢庭材グループは、金沢庭材(株)と(株)クロス クリエイティブ コアの二社で構成されており、造園資材や造園機械全般を扱う専門商社である。本社を金沢市南部（有松）に置き、約 6,000 m²の苗畑を白山市（木津町）に有している。現在は、営業推進として顧客である造園業者の指定管理事業を支援するなど、都市公園マネジメントの分野にも事業を拡大している。先にも述べたが、この事業に関連して、筆者が白山ろくテーマパークの前指定管理者から自主事業に関する相談を受けたことが、白山麓実習プロジェクト誕生の契機となった。ただ、今年度に関して言えば、昨年までのように白山ろくテーマパークと金沢庭材グループの直接的な関わりはない。その中でも金沢庭材グループが白山麓実習プロジェクトに協力を惜しまないのは次のような理由に因る。

（以下、金沢庭材(株) 代表取締役 上田一治さん談話による）

- ①過去の実習の中で培われた地元住民と実習生との絆は、間接的に地元住民と当社との関係を構築するきっかけにもなった。今後もこの関係を維持していきたい。
- ②指定管理者制度をはじめ、これからは公共空間の管理や運営を市民団体が担うケースが増えると予測している。そこには新しいマーケットが潜んでいると考えており、白山麓における市民活動も積極的に支援していきたい（実際に白峰の雪だるま祭りを支援している）。
- ③当社は金沢市南部に本社を置き、資材置き場は本社周辺から白山市まで点在している。そのため野々市ロータリークラブに加盟するなど、白山市を含めた金沢以南におけるネットワーク構築を重視している。白山手取川ジオパーク構想の推進にも微力ながら貢献することで、こうしたネットワークをさらに強化したい。
- ④白山手取川ジオパーク構想の推進は、当該地域の活性化に資するものであり、それに関する経済活動、とりわけ公園や緑地の造成、拠点設置による周辺の植栽、整備等に積極的に当社の資材またノウハウを提供していきたい。

このように金沢庭材グループは、白山麓実習プロジェクトを自グループの企業活動と緊密に関係するものと位置付けており、合わせて「CSR の視点から積極的に協力したい」としている。単なる慈善事業とは一線を画すものであることが分かる。

なお、今年度の実習において、金沢庭材グループでは、

- ①『ワークショップ：始動☆白峰探検隊！～ジオパークには宝物がいっぱい～』のプレスリリースの作成
- ②上記プレスリリースの業界紙に向けた発信
- ③ジオパーク推進室、ボランティア、実習生の懇親会セッティング（9月8日）

を行った。プレスリリースについては、地元企業として有する地元メディアとのコネクシ

ョンを最大限活かそうという狙いがある。また懇親会のセッティングについては、時間と輸送手段が限られ食材などの購入が困難な実習生に配慮し、これを負担することとした。

加えて、金沢庭材グループの一員である筆者が、過去の実習から引き続いて実習生の指導・引率を担当している。

1-7 実習実施場所、宿泊場所

2012 年度については、以下の場所を訪問し順次実習を展開した。

- 9 月 4 日 白山市入り→白山市役所本庁 白山ろくテーマパーク
- 9 月 5 日 白山砂防新道（登山） 白山室堂ビジターセンター
- 9 月 6 日 白山室堂ビジターセンター 白山砂防新道（下山） 白峰温泉総湯
白峰特産品販売施設「菜さい」 白山ろくテーマパーク
吉野工芸の里（財団法人未智之里）
- 9 月 7 日 白山市役所白峰支所（含む白峰地区散策） 白山ろくテーマパーク
- 9 月 8 日 白山ろく民俗資料館
- 9 月 9 日 永平寺（福井県）→帰阪

宿泊場所は以下の通り。

- 9 月 4 日 亀の井ホテル石川栗津店
- 9 月 5 日 白山室堂
- 9 月 6 日～8 日 緑の村コテージ（白峰 御前荘内施設）

1-8 実習行程

2012 年度の実習行程は次の通りである。⁹

【一日目 9月4日（火）】

- 10:30 JR宝塚駅前 集合、出発（※三田以北居住者）
- 11:00 JR京都駅八条口 マツダレンタカー 集合、出発（※宝塚以東居住者）
- 13:00 名神自動車道 多賀SAにて合流
- 15:20 北陸自動車道 尼御前SAにて再合流
- 16:30 白山市役所 観光推進部 ジオパーク推進室へ
・実習開始のご挨拶（30分程度）
- 17:30 白山ろくテーマパークへ
・実習開始のご挨拶（30分程度）
- 18:30 小松市内にて夕食
- 19:30 『亀の井ホテル石川栗津店』チェックイン
風呂、ミーティング、就寝

【二日目 9月5日（水）】

- 5:30 起床
- 6:30 チェックアウト 出発

⁹ 脚注 1 に同じ。

- 途中、コンビニで朝食等、必要な物の確保
- 8:00 市ノ瀬ビジターセンター 駐車 バス乗り換え
- 9:00 別当出合から砂防新道にて白山登山スタート
途中、昼食（持参）、小休憩を挟んで約6時間で白山室堂へ
- 15:00 白山室堂到着
各自、室堂周辺の散策
- 17:00 夕食（白山室堂）
- 20:00 消灯

※悪天候の場合、登山は断念する。室堂のキャンセル料は発生しない。その場合はコテージ泊に切り替える（仮予約済み）他、白峰での情報収集活動や白山ろくテーマパークでのボランティア活動に振り替える。（白山市白峰支所、テーマパーク指定管理者と打合せ済み）

【三日目 9月6日（木）】

- 4:00 起床
- 4:30 室堂出発 御前峰（白山山頂へ）
- 5:20 山頂にて御来光→血の池、室堂
- 6:30 室堂にて朝食
- 8:00 下山開始（砂防新道の予定、全員の体調が良ければ観光新道でも良い）
- 11:30 別当出合到着、市ノ瀬へ
- 12:30 市ノ瀬ビジターセンター
- 13:00 白峰 特産品販売施設「菜さい」で昼食（営業日確認済み）
- 14:00 白峰 総湯 風呂（営業日確認済み）
- 15:15 緑の村コテージ チェックイン
- 15:30 買い出しへ（Aコープ手取店）
- 16:00 Aコープ手取店
（6日夕食、6日～9日までの飲料、7日朝食、8日朝食、9日朝食）
時間があれば白山ろくテーマパーク、吉野工芸の里に立ち寄る。ジオスポット「御仏供杉」は必須。
- 18:00 緑の村コテージ 夕食準備
- 19:00 夕食 夕食後自由（コテージ宿泊者の温泉利用券使用可）
- 21:00 ミーティング、就寝

【四日目 9月7日（金）】

- 7:00 起床
- 7:45 朝食
- 8:45 出発
- 9:00 白山市役所白峰支所到着
『白峰班 班長・小前 上野 常盤 渡部 岡本』
・Webサイト開設のための情報収集活動開始
- 9:30 白山ろくテーマパーク到着
『テーマパーク班 班長・河内 大隅 田中 松岡 上林 武本』
・公園ボランティア活動開始
- 12:00 『白峰班』は、渡部車でテーマパークに向けて出発
- 12:30 『テーマパーク班』、午前の活動終了
『白峰班』、久野教授&野島、テーマパークにて合流 昼食へ
- 13:30 公園ボランティア活動&河内・鳥越・吉野地区の情報収集開始
・河内 大隅 上野 小前 常盤 上林 岡本 武本（野島）は、テーマパーク。

- ・渡部 田中 松岡（久野教授）は情報収集。
- 15:00 テーマパークに再集合、
- ・ポスター発表『これからの白山麓実習プロジェクト』の準備
- 15:30 ポスター発表『これからの白山麓実習プロジェクト』スタート
- ・発表会は上野・松岡・上林・岡本・武本で準備（リサコン総会時のポスター使用）。
進行は野畠、発表者は松岡・上林・岡本を予定。
- 16:30 発表会終了、懇親会準備
- 17:00 吉野園地に移動して懇親会（BBQ）スタート
- 18:30 実習生代表からお礼の挨拶
- 19:00 懇親会終了、緑の村コテージへ
- 19:30 緑の村コテージ到着後、風呂、ミーティング、就寝

【五日目 9月8日（土）】

- 7:00 起床
- 7:45 朝食
- 8:45 出発
- 9:00 ジオパーク・ワークショップ
『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』の会場入り
- 9:10 会場準備、受付準備など
- 9:40 受付開始
- 10:00 集合時間
- 10:10 『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』開始
- ・後記のタイムスケジュールに沿って進める
- 14:30 ワークショップ終了、後片付け
- 15:00 ミーティング（アンケートの精査など）
- 16:00 ミーティング終了、緑の村コテージに移動、ワークショップ使用の荷物片付け
- 17:00 実習打ち上げ 兼 懇親会の準備
- ・金沢庭材㈱の社員、食材、飲料を持参して到着
- 17:30 実習打ち上げ 兼 懇親会 開始
- ・緑の村コテージにてBBQ立食パーティー形式で
- 18:45 実習生から実習を終えての一言挨拶（実習生全員、順番に）
- 19:00 白山市 観光推進部 日比野様からの実習への講評
- 19:00 過ぎに解散、後片付け
- 19:30 コテージへ、風呂、ミーティング、就寝

【六日目 9月9日（日）】

- 7:30 起床
- 8:15 朝食（残りの食材で） 後片付けなど
- 10:00 緑の村コテージ チェックアウト 帰阪
- ・勝山を越えて越前大野、一乗谷、永平寺を見学して帰るルート。

Ⅱ．実習内容の報告（行程に沿って）

2-1 9月4日・火曜日（実習初日） 「白山市入り」

午前10時30分に宝塚駅を出発するグループ、午前11時に京都駅を出発するグループに分かれ、一路白山市役所本庁を目指す。一台はマイカー、もう一台は普通車では最大の10人乗りレンタカーで、後者を筆者が運転する。実習全行程を通して最優先事項は安全の確保であるため、スケジュールにはゆとりを持たせてある。途中、名神高速道路・多賀サービスエリアで宝塚組、京都組が合流、北陸自動車道・尼御前サービスエリアで休憩を挟んで午後3時45分に白山市役所本庁に到着した。

この日は、日比野さんが不在ということで、ジオパーク推進室室長の山口隆さん（白峰支所の山口昭恵さんとの混同を避けるため以下、山口室長の表記する）に挨拶した。

山口室長からは、実習の成功を祈念する言葉と共に、翌日に控えた白山登山について「辛さ八割、だから残りに楽しみがある」という激励のメッセージを頂戴した。実習生の中には当初白山登山に消極的な意見もあったが、山口室長のメッセージを受け、辛い思いをして得る楽しみに期待が湧いたようであった。



10人乗り、白山市役所へ向かう



ジオパーク推進室・山口室長に挨拶

白山市役所に挨拶した後、時間に余裕があったため白山ろくテーマパークに立ち寄ることとした。まず白山ろくテーマパーク吉岡園地を訪れ、公園所長の中村さんに挨拶した。昨年からは白山麓実習に参加している4回生は一年ぶりの対面で、中村さんとともに再会を喜び合った。その後、吉岡園地のロックガーデンや池を散策、はじめて当地を訪れる実習生は想像以上に綺麗に整備された園内に驚いた様子で、夕映えに染まる景色がなお印象的だったようである。

閉園時間の午後5時を回っていたが、吉野園地に場所を移すと、白山麓実習一年目から様々な支援を頂いている小村茂さん、島田鯛子さん、西出一久さんと再会することが出来た。小村さんは高山植物の保全や順化活動に取り組む市民団体「かわち山草会」の代表で、元小松市役所の職員である。都市公園行政にも明るく、園内作業の際に実習生を指導して頂いている。島田さんは隣接する吉野工芸の里で活躍する染色作家であり、白山ろくテーマパークでは草木染め、フラワーアレンジメントといったイベントの講師を務めている。政策提案発表会を中心に、実習生だけでなく筆者も含めて叱咤激励を頂戴している。西出さんは旧吉野谷村の村議会議員として活躍され、現在は吉野工芸の里の運営団体である財団法人未智之里の副理事長でもある。白山ろくテーマパークの運営にも確かな理念と情熱を持たれており、お話を頂く度に筆者自身も学ぶことが多い。三名の方とも地元では

頼られる存在でありながら、実習生には常に気さくに接して頂いている。

小村さん、島田さん、西出さんと昨年から実習に参加している4回生は、満面の笑みで「また来ました!」「よく来たね」と言葉を交わした。その姿には初めて白山麓を訪れた実習生も感激したようで、初日にして白山麓実習の核心に迫ることが出来た。



夕日に映える白山ろくテーマパーク



ギンヤンマが飛び交う吉岡園地の池

吉野園地から宿泊予定の栗津までの道中、道の駅「一向一揆の里」（加賀一向一揆の終焉の地として知られる鳥越城跡を眺める場所にある）に立ち寄った他、ホテル近くで夕食をとり、実習初日を終えた。

2-2 9月5日・水曜日（実習二日目） 「白山登山」

筆者自身は、過去に三度登頂したことがあるが、白山麓実習の引率者としての登山は初めてである。これまでも、白山登山を実習のプログラムに入れたいという実習生の要望は多く、久野教授からも「白山の名を冠するプロジェクトなのだから…」ということで勧められてはいた。ただ、実習生を引率する身としては安全管理を最優先せねばならず、白山がジオパークの目玉であり、白山麓実習と銘打つ限り、白山を学ぶ（登る）ことが重要であることを認識はしていても、過去二年間は登山に踏み切る決断が出来ずにいた。そういった意味では、今年度の実習生数人からは「絶対に白山に登る」という強い意志が感じられ、筆者としても随分背中を押してもらった。そうして迎えた登山当日、栗津のホテルを出発する時の天気予報は登山日が晴れ時々曇り、下山日が曇りだったため幾分気楽になった。さらに勇気づけられたのが日比野さんからの電話である。ホテルを出発しようと運転席に座った時に日比野さんから着信が入った。応援のメッセージと「気をつけて」という温かい言葉を頂き、ようやく明るい気持ちで登山に臨むことが出来た。これは、少し自信がなかった実習生何人かも同じだったはずである。登山口までの道中、日比野さんの細かな心遣いには筆者も実習生も感謝しきりであった。

途中買い出しをして、別当出合登山口（標高1,260m）に到着したのは午前9時だった。市ノ瀬ビジターセンターでバスに乗り換えることを予定していたが、この日は別当出合までマイカーで進入することが出来た。別当出合でトイレや写真撮影を済ませ、登り始めたのが午前9時15分。午後3時の白山室堂到着を目指した。



別当出合の休憩所「登山情報」掲示板前



別当出合登山口

登山道は、素人でも登り易いとされる砂防新道を選択した。この登山道は、中飯場、甚之助避難小屋、室堂が、山頂の御前峰までの間の休憩所また拠点になっている。登り始め前から予想していたことではあるが、実習生は皆一様に登っていくわけではない。登山部、ワンダーホーゲル部の出身者である渡部と武本、また体力がある小前を先頭に、中間グループ、後半グループと差がつく。そのため先頭グループには、休憩所で待つように指示していた他、全員に自分のペースで登るよう伝えていた。筆者は後半グループに入り、最後尾で登った。

中飯場（標高1,520m）の休憩所までは全員比較的余裕があったようだが、ここを過ぎて甚之助避難小屋（標高1,975m）までは辛かったようである。茂みの中のほぼ同じ傾斜を登るので、景色がひらけることもなく単調である。精神的に「まだか、まだか」となってしまう。それでもアクシデントなく予定通りに甚之助避難小屋に到着した。筆者は、この1か月前に下見のために日帰りで白山登山を行ったが、その際に中飯場から甚之助避難小屋を越えれば実習生の気分も楽になるだろうと予想していた。以降は、より厳しい登山道が待っているものの、見晴らしの良い尾根になるため歩いていて清々しい。加えて昼食をとり足取りが軽くなったためか、ここからはあまり間延びすることなくまとまって登ることが出来た。



甚之助避難小屋の前にて昼食



甚之助避難小屋から甚之助谷を臨む

次の難所は、黒ボコ岩の手前の十二曲がりと呼ばれる尾根である。傾斜のある尾根をつづら折りに十二回曲がって登り、黒ボコ岩に辿りつく。ここからは弥陀ヶ原と呼ばれる平らな木道を歩くことになる。黒ボコ岩が標高2,300mであるから、ここまで来ればあと一息である。難所ではあるが、十二曲がりの途中には延命水が湧いており、振り向くと絶景が広がる。青々とした山がどこまでも連なっている。実習生はここに来て俄然元気になったようであった。黒ボコ岩での休憩中は、岩に登ったり写真を撮ったりと楽しく過ごし、次の弥陀ヶ原へ向かう。するとここで山頂が見えた。霧や雲に隠れることなく、はじめて見

る白山山頂、標高2,702mである。目指す場所が目視できたことで、力が漲る実習生。室堂を目指して弥陀ヶ原を闊歩する。



十二曲がりに挑む



黒ボコ岩に登る



弥陀ヶ原にて山頂を背に

弥陀ヶ原の木道を歩き終えると室堂手前の五葉坂に至る。20分程度だが急な登りで、左右を覆うクマザサがいよいよ標高が高くなってきたことを感じさせる。平坦な弥陀ヶ原で回復したはずの実習生だったが、さすがに五葉坂を全員一緒に登るのは難しく、再び間延び。五月雨式に五葉坂を登り切り室堂に到着することとなった。午後14時30分には全員が標高2,450mの室堂に到着。まずはチェックインすることにした。室堂で天気予報等を再確認すると、翌日が雨の予報に変わっている。9月の天気が変わりやすいのか、山の天気が変わりやすいのか、とにかく翌朝御来光を眺めるという予定は断念せざるを得ないと判断した。幸い、室堂到着が予定より30分程早かったため、今から登頂しようということになった。一旦室堂に荷物を置き、軽装で山頂を目指す。そろそろ高山病を心配した方が良いのではと考えだした頃、ふと頭痛が起きていることに気がついた。実習生に「頭痛を起こしていないか？」と声をかけつつ、外れクジを引いたのは自分だけだったようである。とはいえ、やはり実習生も疲労困憊。一部このような姿勢になって少しずつ登っていく。あと僅かで山頂というところまで来た。右側に白山比咩神社奥宮がある。白山比咩神社は全国に3,000社あるといわれる白山神社の総元社であり、祭神は菊理媛（くくりひめ。別名：白山大神）である。白山が、富士山、立山と並ぶ日本三霊山たる所以がここにある。

奥宮の前では先を歩いていた実習生が最後尾のグループを待っていた。残り20m程のところにある白山山頂、御前峰の石碑までは皆一緒に歩こうという粋な計らいである。そんな計らいに心を熱くする数名の実習生。白山登山はクライマックスを迎えた。

午後3時35分、実習生全員が白山山頂2,702mに登頂した。晴天、視界良好。見渡す限りに山と空が広がっている。自分たちが登ってきた室堂側とは異なり、山頂から見る反対の景色は火山としての猛々しい姿を呈している。まさに地球の鼓動、ジオを感じられる場所

である。この山頂に積もった雪が少しずつ解け出し、滴が集まり手取川となる。その流れは人々の営みと文化を生み出し、大海に出で、冬、またこの場所に戻って来る。この命を育む水の旅こそ、白山手取川ジオパークが表現するテーマであり、二日後に控えたワークショップに参加する小学生に伝えなければならない。そのことを登頂した実習生全員が強く認識出来たはずである。山頂にて約40分を過ごし大量の写真を撮影した。名残惜しいものの、日暮れが近づく午後4時15分、室堂に向かって下山を開始した。



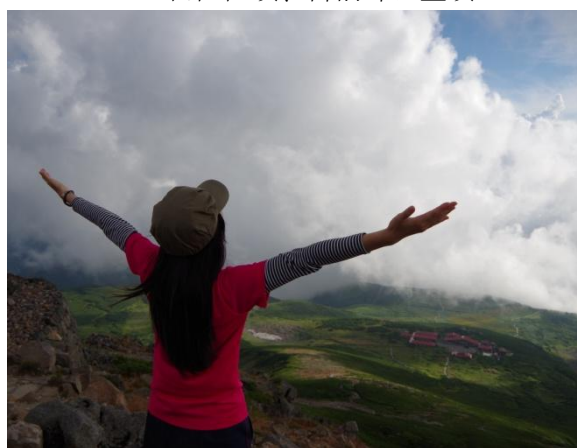
室堂に到着



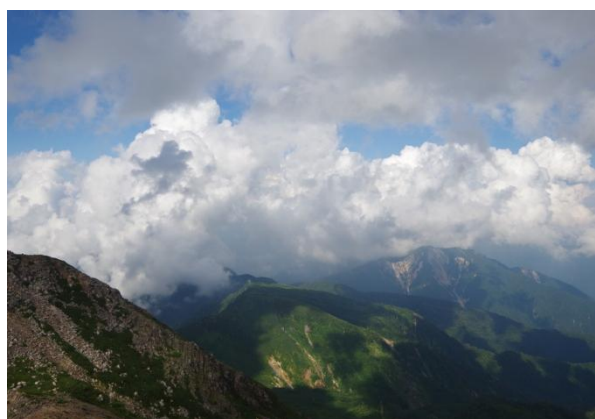
白山山頂、御前峰に登頂



白山火山火口と大汝峰



御前峰から室堂を見下ろす



御前峰の展望、右奥に別山



室堂に戻り山頂を眺める

室堂には午後5時前に戻り、すぐに夕食となった。消灯時間の午後8時までは自由にビジターセンターを見学。実習生の体調が心配されたが、特に不調の報告はない。消灯時間が

早すぎて眠れないと言う者もいたが、消灯と共に皆ぐっすり眠っていた。やはり疲れがあったのだろう。なお、室堂には簡易トイレが設置してあったが、衛生面は決して良い状態とは言えずやや辛い夜になった。

2-3 9月6日・木曜日（実習三日目） 「白山からの下山、翌日以降の準備」

早朝から激しい雨音と雷鳴が聞こえる。無事、下山できるかと心配する中、他の団体が午前5時頃に山頂に向かっていった。実習生の中には、雨音に目を覚ます者もあり不安げな様子。

午前7時頃、実習生が起床した時点では雨は降っておらず一安心。しかし濃霧があたり一面を包んでいる。昨日までハッキリと見えた山頂も今はどこにあるのかも分からない。ともかく朝食をとり、再度天気予報を確認する。雨天、降水確率80%、回復を待って下山すべきか悩んだが多くの登山客は徐々にでも下山すると言い出発していく。砂防新道であれば甚之助避難小屋が宿泊も可能な施設となっているため、まずはそこまでを目指し、我々も慌てずに下山することとした。

室堂から黒ボコ岩、十二曲がりまでは、濃霧こそあれ土砂降りという状況ではなかった。「これならば…」と安心しかけた頃、雨が本降りになり、遠くで雷鳴も聞こえる。尾根を歩くのは危険と判断し、一旦窪地で休憩する。登ってくる登山客から情報を得つつ、雷鳴が鳴りやんだタイミングで下山。甚之助避難小屋まで無事にたどり着くと、そこには大勢の登山客が天候の回復を待っていた。雷鳴こそ鳴りやんだものの、今度は雨が本降りになってくる。僅かに小康状態になったタイミングで、大勢の登山客が一気に出発。我々もこれに続く。ここからは茂みの中に入り雨の直撃こそ避けられるものの、登山道はぬかるみ滑る。先頭を歩く筆者が、後ろに向かって注意喚起した瞬間に尻餅をつく実習生も。それでも中飯場まで着いた頃には雨もだいぶ収まり、ここからは滑る地面との戦いを残す状態になった。

午前11時30分、下山が無事完了。別当出合の駐車場から関係各所に電話連絡をすると、一様に「福井が大変なことになっていたので心配した」と言われる。話を聞いていると平野部は白山よりもはるかに降水量が多かったようである。全員怪我もなく元気に時間通りに降りて来られたことを伝え、別当出合を後にする。この頃には雨は完全に上がり、途中、国立公園巡りスタンプラリーに挑戦している実習生のために市ノ瀬ビジターセンターに立ち寄る。さらに、ジオスポットになっている百万貫の岩で写真を撮影し、白峰温泉総湯を目指す。とにかく早く風呂に入りたいというのが実習生の希望だった。前日は風呂が無かったし、これだけ雨に降られれば当然である。こうして白山麓実習プロジェクトのはじめての白山登山は完了した。計画変更あり、雨天ありの中でも、実習生は忍耐強く歩いてくれた。引率者としては随分助けられた登山となった。



霧の室堂を出発する



濃霧の黒ボコ岩、それでも談笑



市ノ瀬ビジターセンターでスタンプ



百万貫の岩と

白峰温泉総湯で疲れを取り、続いて総湯の差し向かいにある白峰特産品販売施設「菜さい」へ。ここでは地産地消、地物にこだわった食材を楽しむことが出来る。この時点で雨に降られて白山から下山したことなど忘れるくらいリフレッシュしている実習生。天気も晴れに。これからのコテージ生活に備えての買い出し、また白山ろくテーマパークに隣接する吉野工芸の里の見学に向かう。

まずは白山ろくテーマパークにて下山報告を行った。宮腰さんにも挨拶を済ませ、吉野工芸の里を訪ねる。あいにく島田さんは不在だったが、施設を見学し、ジオスポットにもなっている敷地内の御仏供杉（おぼけすぎ）を見に行く。御仏供杉を訪れるタイミングは、過去二年間の実習では政策提案発表会や『キッズすくすく園芸体験』の後だったが、今年度はこれらを行う前になった。明日からの実習本番が成功裏に終わられるよう願をかける。その後、実習初年度から利用しているJA白山のAコープにて買い出しを行う。この店舗は白山ろくテーマパークや吉野工芸の里と隣接しており、吉野谷、鳥越、河内地区いずれからも遠く離れていない。ある意味では、これら三地区の住民が最も集まり場所であり、地域活性化を考える際の一つの拠点になるのではないだろうか。



吉野工芸の里見学



実習三年目も御仏供杉の前で撮影

買い出しを終えた後は、一路白峰を目指す。疲れからか車内で眠っている実習生も見られた。休める時に休み、翌日に備えてもらいたい。白峰では明後日のワークショップ会場となる白山ろく民俗資料館やその周辺を下見し、クイズラリーのルートなどを確認した。この日を含め残り4日間の拠点となる緑の村コテージにチェックインした後、自炊がはじまった。引率者としては実習始まって以来の休憩時間である。夕食後にはミーティングを行い今後の活動を確認、特に翌日に報告会『これからの白山麓実習プロジェクト』の発表を控えた実習生はプレゼンテーションの練習に余念が無かった。ワークショップの備品作り

に励む実習生もあり、同日に白山登山から帰ってきた団体が泊まっているとは思えないほどパワフルなコテージ内だった。



白山ろく民俗資料館横、クイズラリー下見



夕食後、翌日の発表会の練習をする実習生

2-4 9月7日・金曜日（実習四日目）

「白山麓情報収集と白山ろくテーマパークでの報告会」

白峰、吉野・鳥越・河内における情報収集活動と白山ろくテーマパークでの園内作業

この日は午前9時に白峰支所に向かい白峰地区の情報収集を行うグループと、午前9時30分に白山ろくテーマパークに向かい園内作業に従事するグループに分かれ行動を開始した。

白峰支所に向かったグループは、日比野さんと山口昭恵さんの案内の元、栃餅や油揚げ、堅豆腐といった地元の特産物の製造工程を見学した。栃餅作りの見学中には栃の実の試食や、一般開放されていない作業場にも入れてもらうなど、フィールドワークならではの生の情報を仕入れることが出来た。3-1で改めて述べるが、今年度の実習ではワークショップとは別に、白山麓に関する『関西の学生向け情報発信企画』（Webサイト作り）を課題としている。白峰での情報収集はこの中で活かされることになる。



栃の実をそのまま食べる



作業場の見学、ヒアリング調査

白山ろくテーマパークに向かったグループは、例年と同じ様に園内作業に従事した。地元住民である公園スタッフの皆さんと休憩所の掃除、花の摘み取りを行った。筆者は、久野教授を小松駅に迎えに行くため公園を離れたが、その間、実習生は公園スタッフの皆さんからスイカやかき餅を頂くなど、大歓迎されたとのことだった。



花の摘み取り作業風景



公園スタッフの皆さんと

正午には白峰で活動したグループ、久野教授と筆者も白山ろくテーマパークに到着した。昼食は、島田さん特製のハーブカレー。実習生のために5日間も煮込んだとのこと。宮腰さん、中村さんも交えての賑やかな昼食会となった。公園センターのテーブルには蓮の葉をランチョンマット代わりに使い、まるでガーデンレストランのような演出。特性のジュースまで用意されており、カレーは順番におかわりになる好評ぶりだった。島田さんのこの歓迎に「午後からの報告会で応えたい」と、実習生は気を引き締めていた。



島田さん特製のハーブカレー



島田さん、宮腰さん、中村さんと昼食会

昼食後は、白山ろくテーマパークを訪れた公園利用者に無料配布している花の葉作りを手伝った。ここでも講師は島田さんで、実習生は談笑しながら作業していた。過去にも何度か経験済みの作業だが、今回は実習生の人数が多かったため数多く作製出来たようである。また、3人の実習生と久野教授が吉野谷、河内、鳥越の見所の写真撮影に出かけた。午前の白峰での活動と同じで、撮影した写真を『関西の学生向け情報発信企画』に利用しようという狙いである。午後3時には公園センターに再集合し、報告会の準備を開始した。



花の葉作り



綿が滝の前で

報告会『これからの白山麓実習プロジェクトin白山ろくテーマパーク公園センター』

報告会の出席者は、およそ25人程度と考えていたが、開始時間の15分前には公園センターの机と椅子が足りない程の盛況ぶりとなった。石川土木総合事務所（2名）、白山市役所（2名）、㈱岸グリーンサービス（1名）、金沢庭材㈱（2名）、地元雑誌『自然派マガジン山女』の編集長である石原千尋さんをはじめ、公園スタッフ、地元住民（偶然公園にいられて参加された方も含め）の皆さんを合わせ40名以上となり、急遽長机の他にテーブルを配置、また座談会形式（ロの字型）ではなく教室形式（シアター型）へとレイアウトを変更した。

定刻の午後3時30分となり、筆者が司会を務める中で報告会『これからの白山麓実習プロジェクト』が始まった。今回の報告会は1時間少々の中で、

- ①過去二年間の活動、今年度の活動（翌日に控えたワークショップを中心に）について述べる。また三年間の活動を踏まえて、現時点で来年度どのような実習を行いたいのか、久野教授退官後の来年度以降どのようにプロジェクトを展開させようと考えているかについて発表する。
- ②『関西の学生向け情報発信企画』の趣旨と計画概要について発表する。
- ③上記①②それぞれについて、実習生を含めた出席者間において意見交換を行う。
- ④上記①②の発表、また③の意見交換について、地元自治体、㈱岸グリーンサービス、久野教授より講評を受ける。

という内容である。

報告会の冒頭、筆者より、今回の報告会は「白山麓実習プロジェクトの継続のため」また「実習の内容をより地元で資するものにするため」の意見交換を目的として行うものであることを述べた。加えて、筆者は実習生の引率者として「当事者意識」を持って取り組むよう指導していることを説明した。

白山麓実習のプロジェクトたる所以は、インプットだけでなく、インプット（学び）から何をアウトプットすべきかを考え（政策や企画の立案）、実際にアウトプットしてみる（実験）ということにある。そのためには現地の様々な課題とその解決を「他人事ではない」と捉える当事者意識が必要となる。昨年の実習中に実施した『キッズすくすく園芸体験』は、白山ろくテーマパークの集客事業としての一面を有していたわけだが、当時の実習生は、企画立案から参加者募集を自ら行い、途中様々な難題を試行錯誤の末に乗り越えて見事にイベントを成功させた。その過程が決して容易でなかったことは言うまでもない。都市公園の指定管理者が集客事業を展開する難しさ、苦労を味わうことになった。それでも諦めずに取り組むことが出来たのは、まさに当事者意識を持っていたからである。こうした当事者意識を持って臨むことこそ、プロジェクトとしての実習成功の必要条件になる。出席者の皆さんには、そういった視点で今から始まる実習生の発表を聞いて頂き、意見を頂戴したい旨を伝えた。



続々と出席者が集まる公園センター



筆者と宮腰さんの運営席、手前は久野教授

①の発表が始まった。発表する実習生は、岡本・上林・武本・松岡の4名で、全員が今年初めて白山麓を訪れる、いわば新人である。この発表で使うポスター（リサーチ・コンソー

シーム総会記念行事ポスターセッション¹⁰で使用したポスターを一部改編して使用)も今年5月に作製されたものであるから、当時を知るのは4名の内、松岡だけである。しかしながら、4名とも堂々とした態度で話を進めていく。特に松岡は実習生唯一の2回生でありながら、その発表ぶりは際立っていた。

意見交換では、害獣被害に悩む地元住民から「何か対策を」と求められる場面、「白山麓という地域が広すぎて住民間で課題が共有できない」といった意見が出された。また、②とも関わるが「関西から見た白山麓のイメージは？」といった質問もあった。実習生が正直に「実習に来ることになるまでは、ほとんど地名も知らなかった」と答えた時の質問者の苦い表情が、白山麓の現状を物語っているように思えた。確かなことは、来年以降も実習中に考察すべき、また解決に寄与すべき課題には事欠かないということである。時間的な制約から①についての意見交換はここまでとして②の発表に入った。



ポスターをスクリーンで発表



聞き入る出席者の皆さん

②の発表は実習生の小前が行う。小前は4回生だが唯一昨年の白山麓実習には参加していないメンバーである。発表はさすが4回生という印象だったが、こちらについては①以上に質問が多かった。白山麓における誘客、すなわち観光客の増加は、公共施設を有する自治体、また旅館やホテル、飲食店といった民間企業にとって大きな関心事項である。例えば、白山麓はかつて鶴来町も合わせて1町5村にスキー場を有していた。そして、これらのスキー場と連動した近隣の旅館やホテル、飲食店が雇用の場を創出しており、スキー場は地域の象徴的存在だった。しかし、レジャーの多様化によってスキー客が減少した後、白山麓のスキー場は採算共倒れの状態となる。今日では、一部のスキー場を休止、また用途変更を行うなどして選択と集中を図っているが、スキー場と連動していた民業はスキー場と命運を共にせざるを得ない厳しい現実がある。余談だが、金沢市出身の筆者は、小学生時代に白山中宮温泉スキー場のシーズン券を両親に購入して貰い、週に1~2回通っていたことがある。この白山中宮温泉スキー場も現在は休止され、再稼働の予定はない。この事態を鑑みるだけでも白山麓における誘客、観光政策は極めて重要であり、②の発表はこれに関連するものだったが故に出席者からの質問攻めになったのだろう。

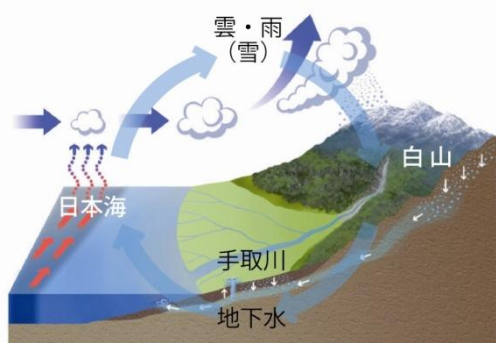
既存の自治体観光サイトとの差別化をどう図るかといった質問があり、「白山麓の皆さんと関西の学生が交流できるサイトにし、皆さんが学生からの要望を掴みながら“白山麓で出来ること”を増やしていくのが、このサイトの特徴」という小前の説明に、一部の出席者から拍手が沸いた。この時点で『関西の学生向け情報発信企画』はまだ始まったばかりで、報告量は決して多くはなかったが、10月現在はさらに具体的な内容が確定している。地元の関心事項でもあるから、これについては3-1で述べることにする。

発表の講評では、石川土木総合事務所の川井勝徳さんより「白山麓の課題を掘り下げて、より効果的な企画、提案をお願いしたい。その意味では白山ろくテーマパークが白山手取川ジオパークにどう関わっていくかということも重要な課題。」という談話があった。ま

¹⁰ 脚注4に同じ。

さに、来年度は都市公園・白山ろくテーマパークと、自然公園の一種である白山手取川ジオパークがどう関わるか、実習生自身考えていきたいテーマとして位置付けている。一方で、白山麓の現実的な課題である「害獣被害対策」やこれに類するものについては、限られた実習期間やリスクを考慮してどこまで関わる事が出来るか、難しい面がある。提案はできても企画までは踏み込めないという可能性が高いのではないだろうか。大学生の実習という側面からも、当事者意識の次には明確な目標を持ち、努力によってこれを達成出来る内容が良いと考えている。現実的な白山麓の課題、大学生の実習という側面、双方のバランスを保つ実習をつくる事が引率者としての今後の課題ということであろう。

白山市役所からは日比野さんと山口昭恵さんが出席され、代表して日比野さんが講評を述べた。まずは「出席者の人数に驚いた。これが3年間継続してきている白山麓実習の一つの成果だろう」との評価があった。ジオパーク推進室の担当者の見解として「ジオパークは白山市の統合のシンボルであり、意見交換の中で出た『白山麓（白山市）は広すぎて課題を共有できない』という問題に対しても、その改善の糸口として推進している」とのことだった。「白山市はジオパーク。たくさんの市民が『ジオパーク』という言葉を発信することで、みんな一体感を持って元気になっていく。そういった象徴として、市民みんなが白山手取川ジオパークを盛り上げていきましょう！」という日比野さんの談話は、いつの間にか実習生への講評ではなく、出席者の皆さんへのメッセージに変わっていた。行政マン魂が溢れる日比野さんの姿を、実習生は羨望の眼差しで見ていたようである。



白山手取川ジオパーク水の旅模式図¹¹



日比野さんの講評

川井さん、日比野さんの講評を総合的に捉えと、新設合併都市ならではの白山市政の課題が、今後の白山麓実習プロジェクトの課題に関連していくように思われた。都市の新設合併は、そもそも財政基盤の効率化が主たる目的であり、それは市民生活にとって必ずしもメリットばかりをもたらすわけではない。もちろん長い目で見れば、自治体としての財政安定化は市民生活の安定に繋がると考えられる。しかしながら、短期間の内は、こうしたメリットよりも新設合併による不安の方が市民感情を支配するであろうし、スキー場や庁舎の統廃合は現実的に市民生活に変化を及ぼす。こうした現状の中で、市民間の意識共有を図ること、市としての統一感を生み出すことは決して容易ではない。しかし、これらの課題が解決されない限り、様々な政策実現に遅滞が発生することは想像に難くない。都市間競争が顕著になる昨今、政策実現の遅滞が市民に与えるダメージは小さくなく、白山麓実習プロジェクトとしても、ジオパーク推進を核に、どのように白山市民、とりわけ白山麓の住民の一体感醸成に寄与すべきか考えていかねばならないと感じた。

指定管理者としての宮腰さんの講評では、「来年も継続して欲しい」「今年よりも早いうちから一緒に計画を練っていきましょう」という温かい言葉を頂いた。実習の受入を表明して頂けることは引率者としては何より有難い。来年再び白山麓を訪れる実習生が、この宮腰さんの言葉に対してどのような活動を見せるか、今から楽しみである。

¹¹ 白山市観光推進部ジオパーク推進室主事 日比野剛さん提供。

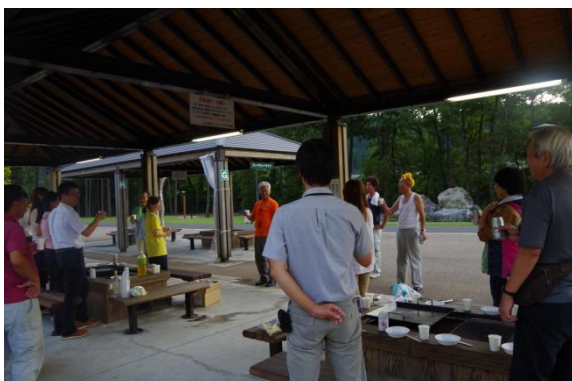
白山ろくテーマパーク・吉野園地での懇親会

報告会の後、午後5時より白山ろくテーマパーク・吉野園地内のBBQ場で懇親会が開催された。この懇親会では、指定管理者の㈱岸グリーンサービスに食材、飲料などを提供頂いた。参加者は、石川土木総合事務所からの2名をはじめ白山市より日比野さん、㈱岸グリーンサービスの3名、地元から小村さん、島田さん、西出さん、その他公園スタッフといった面々で、3か所の炉を使用して盛大に行われた。

筆者は、3か所の炉を順次回ることとし参加者と実習生の交流の様子を観察した。賑やかに盛り上がっている炉、自治体や地元の方の話に真剣に聞いている炉もあり様々だが、どこも有意義な時間を過ごしているようであった。その中で、筆者は西出さんと談笑の時間を持つことが出来た。先述したが西出さんは旧吉野谷村の村議会議員を務められた方で、地元では頼れる存在として知られている。今現在も地元の活性化のために白山ろくテーマパークや吉野工芸の里といった地元公共施設のマネジメントに情熱的に取り組まれており、白山麓実習についても新たな受入手法など、今後のことを色々と提起して頂いた。有難いことである。

宴たけなわではあったが閉会の時間となった。閉会の挨拶は、この日の発表が『これからの白山麓実習プロジェクト』と未来志向のものだったことから、来年度もこの実習に参加する3回生の上林を指名した。彼女の真面目さ、意気込みが十分に伝わる挨拶で、地元の期待感も膨らんだことと思う。こうして2012年度の白山ろくテーマパークでの実習は幕を下ろした。

地元の皆さんに盛大に見送られて、白峰のコテージに向かった。到着後、全員でコテージに隣接する「白山天望の湯」に行くと、そこには翌日に控えた『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』のポスターが貼ってある。ジオパーク推進室か白峰支所からの依頼で貼り出しているのだろう。これには実習生一同から驚きの声が上がった。同時に、明日のワークショップを成功させねばと心を新たにしたのであった。



公園所長の中村さん、乾杯の発声



園内作業もBBQも？指導は小村さん



指定管理者、久野先生、実習生



西出さん、島田さんを囲んで



閉会式、上林の挨拶

「天望の湯」はじめ白山市内の公共施設に
貼り出されていたチラシ

ジオの宝物を探せ!!

白山麓でクイズ合戦

9月8日 10:00 ~ 14:30
実施場所 石川県立白山ろく民俗資料館ほか

始動! 白峰探検隊 ジオパークには宝物がいっぱい
【関西学院大学総合政策学部 白山麓実習プロジェクト】

大学生のお兄さん、お姉さんと一緒に、クイズ合戦に挑戦しよう!
白山ろく民俗資料館や白峰の街に飛び出して、
古い建物、街なみを探検しながら、クイズの答え“宝物”を探します。

●対象 小学校4年生から中学生まで
※保護者も参加可能です
●定員 30名(申込順)
●参加費 500円(昼食代)
●持ち物 筆記用具・水筒・雨具
●集合場所 石川県白山ろく民俗資料館

【申し込み・問い合わせ】
白山市ジオパーク推進室
TEL 076-274-9564
FAX 076-274-9546
E-mail geopark@city.hakusan.lg.jp

2-5 9月8日・土曜日（実習五日目）

「ワークショップ:『始動! 白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』」

白山ろく民俗資料館入りからワークショップ開始まで

いよいよ2012年度実習の目玉であるワークショップ当日となった。実習生には、構想一年、3月から本格的な準備を始めて約半年間の成果を存分に発揮してもらいたい。白山入りしてからも参加者の人数に合わせた計画変更、また雨天時の対策と、万全の態勢を整えて来ている。なお、この日の朝の天気予報は「午前中が曇り、午後から雨がぱらつく」というものだった。

午前9時、白山ろく民俗資料館に到着。資料館事務所で関西学院大学の白山麓実習プロジェクトであることを告げると、会場となる「杉原家」に通された。二回目の訪問だが、石川県内の一棟建ての民家としては最大級とされ、江戸時代末期の格式高さに圧倒される。白山ろく民俗資料館の職員からは、観光客が来た場合は必ず道を開けることなどの説明を受け、激励の言葉も頂いた。県指定有形文化財である。細心の注意を払って使用しなければならない。

我々の到着後すぐに、会場には白山市の榊金沢村田製作所で勤務する高橋徹さんと福井県坂井市のセーレン(株)で勤務する西東祐樹さんがボランティアとして駆け付けてくれた。高橋さんと西東さんにはクイズラリーのチェックポイントで待機頂き、出題をお願いしている。また、ジオパーク推進室からは町澄秋さんがスクリーンを持参して到着された。町さんは金沢大学の博士課程で研究されており、現在白山市役所でインターンシップ中とのことであった。このスクリーンはオリエンテーション時に使用するものである。スクリー

ン、フォトメッセージカード作製のためのパソコンとプリンターのセッティングなど、杉原家内で慌ただしく準備が始まった。資料館事務所横には受付を設置、参加者の到着を待った。

まずは、ジオパーク推進室がチャーターしたバスが到着。これには白山市内の平野部や吉野谷周辺の小学生、ジオパーク推進室の職員、白山市教育委員会白山ろく分室の今川浩さんが乗っており、ワークショップ参加者の大半が会場入りすることとなった。その後は保護者と一緒に参加する小学生が順次マイカーで集まり定刻には参加予定者が揃った。この間に、ジオパーク推進室の山口室長、日比野さん、安田理恵さん、白峰支所の山口昭恵さんが来場され、午前10時10分のワークショップ開会を迎えた。

なおワークショップ当日の予定は図2を参照されたい。

2012年度関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミ白山麓実習プロジェクト
 ジオパーク構想推進・ワークショップ
 『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』運営用タイムスケジュール

◎運営者サイドは青系で塗りつぶし、参加者サイドは赤系で塗りつぶし。太字はワークショップ本線に関する事項を中心に表記。

時間	項目	日比野様	野島氏	常盤	大隅	他実習生	参加小学生	久野教授
10:00～ (受付は10時から開始する)	集合	・民俗資料館への対応 ※プロジェクトとプリンターをご準備頂く。プリンターについては民俗資料館の事務室の主人(あられ)をお借り出来ないか、事前にご検討をお願いする。 ・リンク・用紙は実習生が持参	・受付 ※求められた場合の保護者の方への質問対応	※食代の徴収(会計:徴収後に日比野様へ渡す。)	・ワークショップの進行を踏まえ日比野様と会場・アワウト、準備 ※参加者は受付で自チームを指定されている。 ※参加者はグループに分かれて集合する。	・受付:上野、小前 ・会場準備:河内、松岡、上林、岡本 ・誘導:渡部、田中、武本 ※受付は常盤、会場は大隅の指示に従う。 ※ただし日比野様、野島氏、から指導がある場合はそれに従う。	☆受付を済ませる ☆参加費を支払う ☆自チームを確認の上会場へ	・会場にて待機、もしくは写真撮影
10:10～	オリエンテーション	・白山手取川ジオパークと白峰周辺地域の特色を説明	・オリエンテーション全景写真撮影 ・オリエンテーション、グループ毎写真撮影	◎本日のイベントの趣旨説明、スケジュールの案内	・開会、司会進行 ◎白峰探検とクイズの説明	・オリエンテーション開始の様、各自参加小学生に混ざる。	チームに分かれて集合。誘導は実習生	
10:50～	白峰探検“宝物”探し	・本部 ・緊急連絡対応 ・昼食対応	・探検中各グループの写真撮影 ・不測時の対応指示 ・岡本は野島のサポートまた各チームの不測時対応に備える。 ・田中は待機写真撮影	・水芭蕉Tを担当	・クロユリを担当	・河内:本部にて日比野様サポート 上野、渡部、小前、上林、武本、松岡は各グループのコーディネーターとして参加者と探検	☆グループ毎に白峰探検へ	・いずれか人数の少ないグループに混ざる
11:50～	白峰探検終了	・本部 ・昼食配布	・本部帰還	・本部帰還	・本部帰還	・本部帰還 ・河内は日比野様とともに本部で昼食配布	☆回答シート提出後、昼食へ	・本部帰還 ・昼食受け取り

図2 ワークショップ『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』運営者用タイムスケジュール表 (前半) ¹²

¹² 大隅、常盤作 (原本を添付)

オリエンテーション

ワークショップはオリエンテーションから始まった。進行役を務める大隅はさすが教育実習明け。発声一つで自由奔放にしていた小学生の視線を集める。大隅に続いて常盤がワークショップの計画者としてプログラムの趣旨などを説明していく。まとまった説明で持ち時間を短縮して日比野さんにバトンを渡す。次は日比野さんによる白山手取川ジオパークの講義である。講義といっても相手は小学生であるから、日比野さんは言葉を選びながら進めていく。途中クイズも交えながら、小学生もずいぶん乗り気になっているようである。ここでの講義は、これからのクイズラリーや午後のポスター作製の基礎情報となるため、小学生が集中力を切らさずに聞き入ってくれたことは以後の運営をスムーズにした。再度、大隅に話し手に戻しクイズラリーのルールや注意事項を説明していく。もう小学生は「早くクイズラリーに行きたい」とそわそわしている。大隅の説明が終わり、チームごとに別れた小学生が、保護者、コーディネーター役の実習生に連れられて杉原家を出発していく。ほぼ時間通り、天候も何とか雨天にならずに保っている。このまま天気が崩れず、事故なく杉原家に戻ってきて欲しいと願いつつ、小学生を送り出した。なお、この時点で北陸中日新聞とあさがおテレビの記者が来場していた。



オリエンテーション、大隅・常盤が進める



日比野さんの講義

クイズラリー（白峰探検“宝物”さがし）

5チームに分かれて白山ろく民俗資料館を出発。すでに“なめこ姉さん”役の田中、ボランティアとして参加の高橋さん（門番役）、西東さん（修験者役）がクイズラリーのチェックポイントになる雪だるまカフェ・山岸家・林西寺前で待機していた。久野教授は林西寺、筆者は山岸家と雪だるまカフェにて写真撮影を担当、各チームの到着を待った。当日は白峰の奉納相撲大会が催されており、白峰在住の小学生はワークショップに参加出来なかった。しかし、日比野さんの事前の狙い通り、相撲大会は白峰の文化を十分に感じさせるものだった。特にクイズラリーを実施した午前中は子供の部が開催されており、ワークショップに参加した小学生は同年代の白峰の子供たちが相撲をとっている姿を見ることで、自分が住んでいる地区とは全く違う文化が白山市に存在していることを知ったはずである。だとすれば、地域教育の実践をテーマにしているワークショップ、また白山市の統合のシンボルであるジオパーク、どちらもその意図を伝えることが出来たと考えて良いだろう。

白峰の小道に小学生の笑い声が響く。相撲大会だけでなく、雪だるまの形をした民家の窓、取材に訪れているあさがおテレビのカメラに興味津々である。小学生はクイズの答えを偶然通りかかった地元のお年寄りに尋ねる。お年寄りの方も気さくに応じる。後に白峰支所の山口昭恵さんは「このシーンには随分驚いた」と話してくれた。「普段あまり口数の多くない地元のお年寄りが、小学生相手には優しく対応していた」のだという。去年の『キッズすくすく園芸体験』もそうであったが、子供の笑い声には場の空気を生き活きとさせる力がある。

なお、クイズラリーで使用した問題用紙、回答用紙、地図は以下の通りである。クイズ

ラリー出発前に配る問題用紙には④～⑥の出題があり、地図に従ってチェックポイントに行くと、それぞれの場所で、

- ①チェックポイント：山岸家：ここは昔、どんな役割を持った場所だったでしょう？
＝答え：O：取次元(代官所のようなところ)
- ②チェックポイント：林西寺：現在、白山本地堂には十一面観音菩薩像がありますが、これは昔、白山の頂上から下ろしてきたものです。どのようにしておろしてきたでしょう？＝答え：N：人力
- ③チェックポイント：雪だるまカフェ：おろしうどんを食べ終わった時に言うセリフは何でしょう？＝答え：B：もうようござる

の出題がある。これら①～③の答えは、チェックポイントにいる“なめこ姉さん（田中）”のセリフ、また“代官所の門番（高橋さん）”や“背負い子を担ぐ修験者風の男（西東さん）”の装いから分かるようになっている。ちなみに、④～⑥の問題の解答は、

- ④白峰の特産物であるきのこは何でしょう？＝答え：U：なめこ
- ⑤集落で見かける屋根に掛けられたはしごは何のために使われるでしょう？＝答え：K：雪下ろし
- ⑥蔵町は何をくいとめるために作られた？＝答え：E：火

となる。①～⑥の問題の解答はアルファベットの選択肢から選ぶが、正解のアルファベットは①～⑥の順に「O・N・B・U・K・E」となる。これを並べ替えて出来あがる言葉「BOUKEN＝冒険」を、解答用紙中の虫食いに当てはめると「大人になってもふるさとには“冒険”がいっぱい」となり、この一文が“宝物”という趣向である。この趣向が小学生にどれだけ伝わるか、この点は不明だが、ともに参加している保護者には「ふるさとを再認識するきっかけになるのでは？」という実習生の狙いがあった。ワークショップ後の満足度調査の結果を見ると、概ねこの予想は外れなかったといえるだろう。

問題用紙

④ 白峰の特産物であるきのこは何でしょう？

⑤ 集落で見かける屋根に掛けられたはしごは何のために使われるでしょう？

⑥ 蔵町は何をくいとめるために作られた？



解答用紙

① _____

③ _____

⑤ _____

② _____

④ _____

⑥ _____



選択肢：答えになるアルファベットを選んでね♪

A：水	B：もうようござる	C：茶	D：マッサージ
E：火	F：自転車	G：彫像です	H：湯外桶
I：満腹じゃ	J：トリュフ	K：雪下ろし	L：醤油作り
M：山賊	N：人力	O：取次元(代官所のような役割)	
P：スゴゾケ	Q：カモシカ	R：山ガール	S：化石調査
T：お気遣いなく	U：なめこ	V：カラオケ	W：マツタケ
X：かたじけない	Y：猿退治	Z：エリンギ	

キーワードクイズ：①～⑥のアルファベットを入れ替えると、ある言葉になります。
大人の皆さんも一緒に考えて下さいね！
漢字2文字で下の口に入力してみよう！

大人になってもふるさとには
□□がいっぱい

クイズラリーの問題用紙と解答用紙¹⁴

¹⁴ ワークショップチーム作製。



クイズラリー地図¹⁵

結局クイズラリー中に雨が降ることは無く、全てのチームが予定通りに白山ろく民俗資料館に戻ることが出来た。一安心である。しかし、午後のポスター作製、フォトメッセージカード作りをスピーディーに行うべく、実習生の緊張は続く。



クイズラリーに出発する恐竜チーム



奉納相撲の様子



チェックポイント山岸家前の賑わい



雪だるまカフェの前のなめこ姉さん

¹⁵ 脚注 14 に同じ。

昼食とフォトメッセージカード作り

クイズラリーの後、白山ろく民俗資料館で昼食となった。昼食は日比野さんが手配、参加者に弁当が配布された。

杉原家の縁側で食べるチーム、敷地内で虫取りをしながら食べるチームなど様々あり、この間にも小学生、保護者、実習生の親睦が深まった。一方、クイズラリー中の写真を現像、フォトメッセージカード作りも同時進行していた。短時間で作製できるよう必要な下準備を整えてからの作業で、チームのコーディネーター役以外のメンバーで行った。



杉原家の縁側で昼食



なめこ姉さんからお面を奪う

ポスター作製

クイズラリーに続いて、ワークショップのもう一つのメインイベントとなるのがポスター作製である。これは午前中の日比野さんの講義とクイズラリーで勉強した内容をアウトプットするという目的で行うもので、各チームがそれぞれに割り当てられたポスターのピースを作製する。合計9枚のピースの内、事前に実習生が4枚を作っており、残りの5枚を小学生が作製する。9枚をつなぎ合わせると、白山手取川ジオパークの「山と雪のエリア」（白峰を含む）が表現される。

作業では床や柱などを傷つけないよう細心の注意を払う。持参したブルーシートや新聞紙で予防し、ペンは水性のもの以外は使用禁止とした。また、描く作業や刃物の使用を避けるため、ちぎり絵によってポスターを作製する。各チームに配られた用紙には事前に下絵（色なども概ね指定している）が描かれているから、小学生はこれに従って色紙をちぎり、貼っていく。作業自体が難しいわけではないが時間が足りるか心配である。予定時刻までに完成させられるよう、コーディネーター役以外の実習生も担当の仕事が終われば迅速に手伝いに加わる。ポスターには見所（例えばクロユリ、山岸家、恐竜パーク等）の説明文を貼りつけるようになっているが、これについては保護者にも文章を考えてもらった。ただし、実際に書く作業はあくまでも小学生が行う。クイズラリー中はチーム行動を嫌っていた小学生でも、“作り上げる”という明確な目標があると取り組みやすいらしい。ポスター作製は頑張っていた。

しかし、やはり予定時間が迫ってくる。ピースによっては完成したところもあったが、一部遅れているチームがあった。この時には久野教授や白山市の職員も手伝いに入り、何とか時間通りに全てのピースを完成させることが出来た。ある意味では、これも実習生の作戦通りで、事前に「いざとなれば…」と想定していたことが実現した形である。当初、完成したポスターは白山市内のいずれかの公共施設で展示する予定としていたが、日比野さんからは「白山市役所本庁や各支所、イベントの際など、多くの場所に持ち込む方式が良いのでは」との提案があった。本報告書を執筆している現在は、既に日比野さんの提案の通りに各所で貼り出されているようである。

その後、久野教授から小学生への「将来、今日のイベントがふるさとを思い出すきっかけになれば…」というメッセージがあり、ポスター作製も大成功の内に終わることが出来た。残すところはフォトメッセージカードの配布だけである。



杉原家内のポスター作製の様子



担当のピース作製に励む小学生



自チームの担当ピースが完成



久野教授からのメッセージ



完成した白山手取川ジオパーク「山と雪のエリア」ポスター

ワークショップ閉会式、解散

ポスター完成時点で、フォトメッセージカードも参加の小学生全員分を作製済みだった。各チームのコーディネーターは自分の担当チームに所属していた小学生の分を持ち、杉原家の玄関で待機。進行役の大隅もコーディネーターとして玄関先で待機したため、閉会式の進行は岡本が代行した。彼女らしく、しっかりと原稿を準備し対応した。

閉会式が終わり、帰路につく小学生に杉原家の玄関でフォトメッセージカードが配られた。カードを読んでいる小学生、実習生と一緒に記念写真を撮影する小学生、思い思いの解散となった。全ての小学生が会場を後にした時、このワークショップのリーダーだった大隅と常盤の感極る姿があった。山口昭恵さんと抱き合って成功を喜ぶ姿は、筆者のみならず多くの関係者、また来年プロジェクトを背負う後輩達の心を打ったはずである。

構想一年、準備期間半年の白山手取川ジオパーク・ワークショップ『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』は、こうして大団円を迎えた。



フォトメッセージカードに見入る



ワークショップ後記念撮影

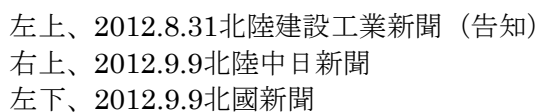


山口昭恵さんと大隅・常盤



小学生に配布した
フォトメッセージカード

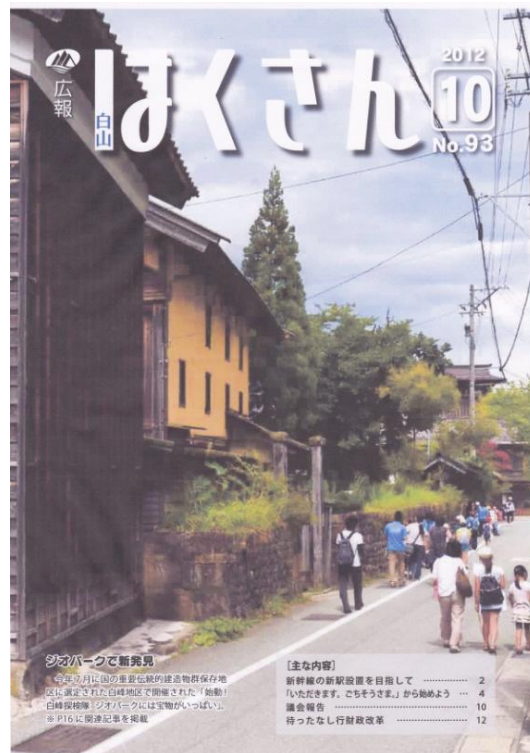
計画段階では、地元の北國新聞、北陸中日新聞の二紙において記事にすることを目指していた。ところが、実際にはこの二紙に加えて、北陸建設工業新聞に告知記事が掲載された他、あさがおテレビのニュース報道があり、白山市広報誌（広報はくさん10月号）には表紙に取り上げられた。また、ワークショップの実施にあたって、ジオパーク推進室が配布したチラシ（26P）も白山手取川ジオパークに認知度を高める上で少なからず貢献したと考えられる。このように、ジオパーク構想のPRという目的に対しては、記事に大小の差はあるものの想定以上の成果を上げることが出来た。





上、テレビ局のカメラが入ったオリエンテーション

右、白山市広報『はくさん10月号』表紙
(2012.10)



なお、実習生による学部Webサイト（ゼミブログ）での白山麓実習報告、個人のFacebookなどへの書き込みなども、僅かながらジオパーク構想のPRに資するものであるし、金沢庭材グループのWebサイトにおいてもワークショップの実施報告を掲載している。

②地域教育の実践について

ポスター作製終盤の時間に、参加の小学生および保護者に対して満足度調査を実施した。結果については以下の通りである。

【回答者・・・全15名(小学生9名、保護者6名)】

- ・ 白峰へ初来訪(5/9) *小学生のみ回答
- ・ ジオパークについて知らなかった(5/9) *小学生のみ回答
- ・ 白峰についてよく学べた(9/9) *小学生のみ回答
- ・ また白峰に来たい(9/9) *小学生のみ回答
- ・ 地域教育は達成できた(6/6) *保護者のみ回答

ここまでの内容は地域教育としての効果を示すものである。

まず、はじめて白峰を訪れたという小学生が5人おり、白山市居住の小学生であっても市内全域を知る機会は少ないという印象を受けた。その意味で、白山市統合のシンボルであるジオパークを学ぶ目的で白峰を訪れる機会を提供できたことは、地域教育の定義とされる「ふるさと＝白山市の再認識」という点で意義があったといえる。

ジオパークについて「知らなかった」と答えた小学生がいたことも意外であった。逆に、「知らなかった」と答えた小学生にはとって、このワークショップが知るきっかけになったことは言うまでもない。

白峰は白山麓の中でも特に見所が集約された地区である。当然、ジオスポットも点在しており、この地区について学ぶことは、白山麓の暮らしや文化、ジオパークを理解する上で効果的である。加えて、白峰への再訪を希望する声が上がったことは、ふるさとへの愛情を育てるという面での成果といえる。

上記結果の通り、地域教育の実践という目的は達成されたと判断出来る。

また、満足度調査では、「今回のワークショップは楽しかったか?」「同様の企画にまた参加したいか?」を小学生、保護者ともに質問した。結果は下記の通りである。

- ・ 楽しかった (15/15) *小学生、保護者とも回答
- ・ また参加したい(15/15) *小学生、保護者とも回答

2問の回答から、今回のワークショップは参加者を十分に満足させられたと判断される。これについては、山口室長や山口昭恵さんから「運営者が学生だから楽しんで貰えた。自治体職員だけでは同じことをやってもここまで楽しんで貰えない。」という話を聞くことが出来た。これは実習生にとっては嬉しいことだが、少し俯瞰して捉えれば、久野教授の指導のもとで実習生が運営者になり、下準備を白山市が整え、双方の仲介を筆者（リサーチ・コンソーシアム会員としての役割）が担当、さらに(株)岸グリーンサービスや金沢庭材(株)といった企業の支援、ボランティアなど地元の皆さんからの応援があったからこそその成果であることが分かる。実習生だけでは、下準備や連携基盤を作ること、現地での物資の確保などはほとんど不可能である。昨年もそうであったが、学生がいかに持ち味を発揮するためには、関係主体間の協力、連携によって、そのステージを整えることが欠かせないのである。

ワークショップ打ち上げ兼懇親会

ワークショップの閉会と共に、2012年度の白山麓実習の主たる活動は完了した。残りのプログラムは、ワークショップの打ち上げを兼ねた懇親会と翌日の帰阪のみである。

ワークショップの後片付けを済ませコテージに戻った時には、皆疲れた様子だったので、予定していた反省会は無しにしようと考えていた。コテージに着いて、そのことを実習生に伝えようとした時、いち早く小前が「ミーティングを始めましょう!」と言う。やむなくミーティングを行ったが、いざ始まってみると先ほどまでの疲れた雰囲気は消える。さすがは白山麓実習プロジェクトの実習生である。

なお、ワークショップの途中から、昨年の白山麓実習プロジェクトのメンバーで、現在社会人1年目になる卒業生が合流していた。昨年の実習のリーダーだった榎香保里に、和田美香、椿本くるみ、和田真莉恵の4名である。現在の白山麓実習プロジェクトの礎を築いた4名であり、来年度以降プロジェクトの中核を担う2、3回生に積極的に話しかけてくれた。2、3回生には卒業生の経験を貪欲に吸収し、自分たちの代へと引き継いでもらいたい。

さて、懇親会である。主催は金沢庭材(株)で食材や飲料全ての持ち込みを依頼した。午後4時半ごろに同社の上田社長、山本社員がコテージに到着、久野教授、卒業生も交えてBBQの準備が始まった。午後5時を回ると、ジオパーク推進室の山口室長、安田さん、町さん、白峰支所の山口昭恵さんが到着、続いて昨年の実習でお世話になった石川県立明和特別支援学校の前川哲昭先生、日中のワークショップにボランティアとして参加してくれた西東さんも加わり、総勢30名ほどとなった。

筆者の挨拶に続いて、山口室長に乾杯の音頭をとって頂いた。その際、山口室長からは「(白山麓実習を)10年は続けて欲しい」というメッセージを頂戴した。今回のワークショップの成功を、来年、再来年に活かしていくことで、さらに大きな成果が望めるし、継続することで地域に根付く部分が大きいということである。白山麓実習プロジェクトの目的が地域活性化に寄与することであるならば、まさに山口室長の「10年継続」という課題に挑戦すべきであろう。

日比野さんは白峰で開催されていた奉納相撲大会の大人の部に参加されていたため遅れてBBQ場に到着した。その際、筆者から今回の実習において日比野さんから多大な支援を頂いたことを紹介し、感謝を述べた。限られた時間ではあったが、山口室長はじめ白山市役所の皆さん、金沢庭材(株)の皆さん、前川先生、西東さんとの親睦を深めることが出来た。

卒業生が参加していたことについて、山口昭恵さんの「卒業しても来てくれるというのは本当にここが好きだからだろうし嬉しい」という言葉が心に残っている。この実習をきっかけに、実習生が白山麓を第二のふるさとのように思ってくれるならば筆者としても嬉しいと思う。

この懇親会は予定時間を大幅に超える盛り上がりで、進行役としてはいつ締めれば良いか迷うほどであった。それでも、最後は実習生一人一人が感謝の気持ちと、来年度に向けた抱負を述べ閉会とした。自分たちの力で実習を作り上げたという満足感（むしろ安堵感の方が大きかったかもしれないが）に涙する4回生、そんな先輩たちの姿に感動する2、3回生、全員で一つの白山麓実習を作り上げてきた。これほどまでに学生自身に使命感を持たせて取り組むプロジェクトは決して多くはない。白山麓実習プロジェクトの厳しさは、社会人と一体になって一つの目標に取り組むことにあり、その社会人とは複数の自治体、複数の企業、地元住民と、様々な立場の人を指す。様々な立場、様々な価値観を前にし、社会経験の乏しい学生にとっては低くないハードルが続いて行く。しばしばアイデアが却下されることもある。そうした中で、今年度も白山麓実習プロジェクトを大成功に導いた実習生に最大限の敬意を表したい。



山口室長、乾杯前の講評中



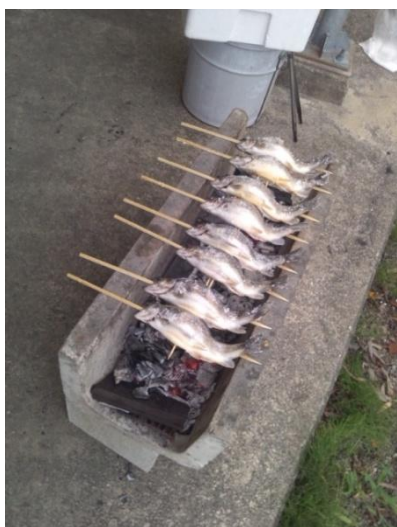
久野教授と応援に駆け付けた卒業生・榎



4回生、小前のスピーチ中



来年度のリーダー、3回生の上林



山口室長差し入れの岩魚



白山市の皆さん、金沢庭材㈱の皆さん、前川先生、
西東さん、白山麓実習プロジェクトメンバー
(実習生&筆者、卒業生)

懇親会後は、コテージに戻って実習最後の夜を遅くまで楽しんだ。

2-6 9月9日・日曜日（実習最終日） 「帰阪」

午前10時に緑の村コテージを出発。久野教授、卒業生4人も同行し福井県の永平寺を見学して関西に向かう。永平寺観光は実習の本線ではないが、現役生と卒業生が触れ合う時間であり貴重。そういう意味では、昨年まで帰阪の際に立ち寄っていた白川郷とはまた違った趣がある。白山麓実習プロジェクトも永平寺の厳しい修行に習って、先輩から後輩へと、その使命感や経験を受け継いで貰いたいものである。

日曜で天気も良く、永平寺門前は混雑していた。観光地として活気づくことは経済面では歓迎されることだが、景観や山寺本来の落ち着きを感じられなかった部分ではいささか残念であった。例えば、駐車場の客引きはあまりに露骨で、公道で待機して声をかける人たちの様子は決して美しいとは言えないし、何よりも危険である。

白山麓も観光地として活性化することは求められるものの、その場所本来の美しさや個性を失うことは避けたい。このバランスは観光政策を考える時に重要である。そういえば、昨年、一昨年に白川郷に立ち寄った際も同じようなことを感じた。

永平寺観光を終え、昼食をとった後で卒業生と別れた。卒業生2名は小松空港から勤務地の東京に戻らねばならない。我々は北陸自動車道から名神高速道路に入り、多賀サービスエリアで解散式を行った。実習生唯一の男子である渡部の一本締めで、JR京都駅から家路に着くグループ、JR宝塚駅から家路に着くグループに分かれ、それぞれ車に乗り込んだ。渡部はもう少し運転手として頑張らねばならないが、彼のお陰で全員が無事に帰宅できた。

5泊6日、白山麓実習がはじまって最長の実習期間となった。それでも期間の長さを感じることは全く無かった。むしろ短く感じたくらいである。白山登山の影響もあるだろうが、何よりも実習生全員が集中して過ごしたことの証明だろう。もう少し遊ぶ時間があっても良かったかもしれない。しかし、白山も白山麓も…実習生の再訪を心待ちにしている。卒業する4回生とも、また会う日が来ることを信じて。



コテージ出発前



永平寺参道にて

Ⅲ. 白山麓実習プロジェクトの展望

3-1 継続プロジェクト『関西の学生向け情報発信企画』の紹介

2012年度から白山麓実習プロジェクトは『関西の学生向け情報発信企画』に取り組んでいる。この企画は、

①関西の学生を白山麓に誘客すること

②関西の学生と白山麓との交流をきっかけとして、地域の新たな魅力を見出すことの二点を目的としたWebサイトを立ち上げるというものである。では、なぜ上記①②を目的としてこの取り組みを開始したのか、その理由、趣旨を以下に述べる。

〔①に関して〕

白山麓の既存の観光Webサイトは、世代などを差別化せず広く誘客を行うものである。一方、白山麓実習プロジェクトでは、あえて誘客の対象を「関西の学生」に絞ることにより、対象の要望や感覚に合致したWebサイトを開設、既存の観光Webサイトとの差別化を図った上で白山麓の誘客に貢献することを目指す。（＝仮に「一次誘客」とする＝A）

〔②に関して〕

①の取り組み、また開設するWebサイト内に掲示板やFacebookを活用した交流スペースを設けることで、関西の学生と白山麓との情報交換を活発化させる。これを通して、白山麓側では「関西の学生が白山麓でやりたいこと」を把握、白山麓にて実施可能であれば新たな誘客要因として活用する。（＝仮に「魅力創造」とする＝B）

〔①、②から生まれる二次誘客＝C〕

①(A)+②(B)=C…関西の学生と白山麓の交流によって生まれた新しい地域の魅力は、二次的な誘客へと繋がっていく。

上記フローの実例が、昨年の『キッズすくすく園芸体験』である。

『キッズすくすく園芸体験』は、白山麓実習一年目に、実習生（関西の学生）と白山ろくテーマパークの指定管理者（白山麓側）との情報交換の中で生まれた企画である。「都市公園の集客事業に挑戦したい」という実習生の要望を、指定管理者が受入れた格好だ。

その一年後の白山麓実習二年目、実習生10名が白山麓に入り、4泊5日の活動を展開（＝一次誘客＝A）。その間に『キッズすくすく園芸体験』を実施（＝魅力創造＝B）、白山麓だけでなく金沢市南部や野々市町（現野々市市）から参加者を集めた（＝二次誘客＝C）。

『キッズすくすく園芸体験』は、実習生の研究テーマを反映した形で行われたものだが、研究活動のみならず、大学生は部活動やサークル活動といった中でも、第三者を招致するような企画に挑戦したいという要望があろう。例えば、コンサート、スポーツ大会のようなイベントは容易に想像できる。こうした要望に白山麓が応えられた場合、『キッズすくすく園芸体験』のような形で二次誘客を生み出すことが考えられる。また、直接的に二次誘客を導くものでなくとも、学生の要望を受け止めることで、新たな白山麓の面白さ、楽しみ方を創造できる可能性がある。これが間接的に二次誘客を誘発することも期待される。

『関西の学生向け情報発信企画』とは、上記フローの出発点となるよう、白山麓の情報を関西の学生向けに発信するWebサイトを立ち上げるものである。ジオパーク推進室や白山麓に位置する白山市役所支所のアドバイスを基に、運営や管理については白山麓実習プロジェクトの実習生が行う。また、白山麓実習プロジェクトの協力企業である金沢庭材㈱や筆者がWebサイト設立に関する手続き的な面をサポートする予定である。なお、この企画は現在進行形であり、あくまでも中間報告として記述した。現段階でのWebサイトのイメージ、開設時期などについては本報告書末尾に記載するポスター¹⁶が詳しい。

¹⁶ 本報告書末尾に記載。ポスター『白山麓誘客 Web サイト for 関西』。小前作。

3-2 3年間の軌跡から見るプロジェクトの理念

白山麓実習プロジェクトは、過去三年間、年度毎に目標とした「政策提案発表会」、園芸福祉事業「キッズすくすく園芸体験」、ジオパーク・ワークショップ「始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～」を成功させてきた。しかし一方で、このプロジェクトの意義と理念が、十分に実習生に伝わっているのか、また今後伝えていくことが出来るのか、憂いがあるのも事実である。

まず、このプロジェクトは産官民学それぞれが役割分担をして実習を計画していくところに最大の特徴がある。企業、自治体、地元住民の皆さんというように様々な立場の社会人が関わっている。しかも、企業や自治体は単一ではない。これは白山麓実習プロジェクトが様々な角度から評価されることを示している。そのため実習生にも可能な限り社会人のマナーや礼儀、ルールをわきまえて欲しいと考えている。もちろん全てを社会人と同じ感覚で…というのは難しい。しかしながら、3回生は実習の数か月後に就職活動を控える身である。報告・連絡・相談の徹底、割り当てられた仕事への責任を持った取組み、スケジュール管理など、どれも社会人の基礎といえるもので、白山麓実習プロジェクトはその入門編と考えてもらいたい。多くの学生と触れ合う学内の教授陣は、それ故に学生一人一人との個別の向き合い方、指導方法を熟知している。しかし、筆者は学内の教員ではなく企業経営者である。この視点から実習生を見れば、社会人になるにあたって、誰に、何が足りていないかをシビアに感じ取ることになるし、その点を指導しなければならないと考えている。大学が学生個々の論理的思考や感性、あるいは哲学を鍛え深める場だとすれば、このプロジェクトは、仕事の現場、そして超就職氷河期の向こう側に吹く社会の風を知る場であり、ここに意義がある。

次に、当事者意識をもってプロジェクトに取り組むことである。その趣旨は先に述べたが、当事者意識なくして実習の「実」は学べない。過去三年間の実習では、地域の課題解決や公共空間の利用効果向上をテーマとして取り組んだわけだが、これらを他人事としていたのでは自分に割り当てられた仕事に責任を持つことは出来なかったはずである。プロジェクトの実習生は、“白山麓の当事者”として、現実、実現、実施、実験といった「実」の一字にこだわって欲しい。自分たちには何が出来なくて、何が出来るのかを考えてもらいたい。そして「出来る」と判断したことには、責任感を持って最後まで諦めずに挑戦して欲しい。実習生一人一人がこうした当事者意識をもって努力していれば、必ず現地の自治体や企業、地元住民の皆さんの支援が得られ、成功までの道が拓かれていく。これが白山麓実習プロジェクトの理念である。

この項では、実習生に対し少し厳しいメッセージを送ることになってしまった。しかし、何も2012年度の実習生に不足があったと言っているのではない。今後に向けて、引率者としてプロジェクトの意義や理念を明確に伝えていかねばならないという覚悟を示したまでである。2、3回生の実習生が自身のスタートを切る際には、一度プロジェクトの意義や理念を振り返ってもらえたらと思っている。



実習一年目、政策提案発表会



実習二年目、『キッズすくすく園芸体験』

3-3 今後の展望

2010年、2011年の過去二年間の白山麓実習は、関西学院大学 総合政策学部 久野ゼミの夏季実習の一つとして実施してきた。しかし、今年度をもって久野武教授の退官が決まっており、これに伴い白山麓実習プロジェクトも新しい体制の構築を迫られている。

すでに今年度、3回生の実習生は久野ゼミではなく4つのゼミから横断的参加している。しかしながら、今年度の体制をそのまま来年度以降に引き継ぐかということ、そうではない。例えば、新たな実習生の勧誘をゼミ横断的に行うとすると、チラシ配りなどに奔走せねばならず、実習そのものの準備時間が制約されてしまう(今年度がまさにそうであった)。また、完全にゼミ横断とした場合、主力となるゼミがなくなる。実習生の所属ゼミが全て異なるということになれば打ち合わせの時間調整も困難になる。さらに、責任教員、指導教員はどうするのかという問題も出てくる。

そこで現段階における来年度のイメージとしては、既存の2、3回生の実習生に、久野ゼミの後継として誕生する佐山ゼミ(現、環境省近畿地方環境事務所所長 佐山浩氏)の学生を加えた形を考えている。既存の実習生が4人であるから、おおよそ3人程度の佐山ゼミ生の参加を希望したい。この体制であれば、新人募集にかかる労力は余り生じなくなり、かつ主力となるゼミも明確になる。佐山ゼミとしても来年度は4回生不在ということになるから、白山麓実習プロジェクトの現3回生が4回生として時々ゼミに参加すれば、3回生だけのゼミにあって身近な先輩になれるはずである。いわば佐山ゼミのゼロ期生というところだろうか。久野教授を通し、また筆者も佐山先生とは打合せを済ませており、上記について快諾を頂いている。

同時に、白山麓実習プロジェクトのリサーチ・コンソーシアム協賛事業化を目指していく。リサーチ・コンソーシアムについては先にも述べたが、白山麓実習プロジェクトは筆者が引率者であることも含め、その内容がまさに当該機構の趣旨に合致している。その上、実際に複数のゼミ生が参加していることを鑑みれば、単一のゼミの夏季実習という位置付けよりもリサーチ・コンソーシアム協賛事業とする方がいっそう相応しい。また、学内の公式的なプロジェクトとなることにより、企業の資金的な援助を受けやすくなるというメリットもある。なお、責任教員は佐山先生にお願いしたいと考えている。

さらに、白山麓実習プロジェクトの支援団体を発足させたい。この支援団体は、プロジェクトの卒業生を中心に構成するもので、過去二年間のプロジェクト卒業生と今年度の4回生を初期メンバーと考えている。また退官される久野教授、現地において数々の支援を頂いている明和特別支援学校の前川先生やボランティアとして参加して頂いた高橋さんや西東さん、金沢庭材(株)社員、体制が整ってからは地元の方にも参加してもらいたい。加えて、白山麓実習に直接参加していない久野ゼミ卒業生の参加も期待したい。活動としては、主に実習生への助言、物資・資金面の支援、場合によっては引率補助者の派遣といった役割を想定している。

IV. 総括

2012年度の白山麓実習プロジェクトも想像以上の成果を上げることが出来た。特に『始動！白峰探検隊☆～ジオパークには宝物がいっぱい～』は、多数のメディア、広報機関に取り上げてられ、白山手取川ジオパーク構想の推進に寄与したといえるだろう。また、ワークショップのもう一つの課題であった地域教育の実践についても、ふるさとの白山市に、自然と独自の伝統文化が今なお息づいている白峰という地があることを参加した小学生の多くが学ぶこととなった。

今回のワークショップは、白峰で開催された奉納相撲大会と日程が重なったが、これは織り込み済みであった。確かに白峰に住む小学生の参加は見込めなくなるため、ワークショップの参加人数だけを考えれば日程をずらす選択肢もあったかもしれない。ただ、ここは日比野さんの「白峰の雰囲気を知ってもらうためには、あえて相撲大会の日を実施した方が良い」という狙いがズバリはまった格好である。繰り返しになるが、白山手取川ジオパークは、地球科学的に見て貴重な自然遺産の保全、またこれに学び親しむというジオパーク本来の目的に加え、1市2町5村が2005年に合併新設された白山市の統合のシンボルという側面を持っている。その意味で、白山市で生まれた子供たちには、ジオパークを学ぶことをきっかけに、自分が住んでいる近所だけでなく白山市全域をふるさとと感じてもらいたい。それでこそ白山手取川ジオパークは、白山市統合のシンボルとしての役目を果たせる。こうした中でジオパークと地域教育を結び付けてワークショップを企画した実習生の目の付け所、これは的心を捉えていたといっても過言ではなかろう。

一方で、実習生が活躍した舞台は、複数の主体、また多くの地元の支援によって整えられたものであることを忘れてはならない。これは実習の成功要因であるとともに、関係する主体間の距離を縮め、それぞれの持ち味を発揮することで、些細な企画が一気に華やかで魅力的なものになることを実証した。白山麓には、過疎化・少子化・高齢化、農地山林の荒廃など課題が山積している。雇用の創出、スキー場に代わる集客施設の整備も急務である。ジオパーク構想の推進も白山市民の意識共有を図るという使命を負っている。これらの一つ一つの課題を解決するにあたっての白山麓実習プロジェクトの取り組み、それ自体は微力であろう。しかし、その産官民学の横断的な取り組みをモデルケースとして捉えれば、課題解決に向けた突破口が見えてくるかもしれない。

筆者が所属しているリサーチ・コンソーシアムは、「企業、研究所をはじめ、官公庁、その他の機関等と研究協力を促進し、人的交流を図るための組織」¹⁷と説明されている。その中で白山麓実習プロジェクトは、企業（柵岸グリーンサービス・金沢庭材グループ）、官公庁（石川県・白山市）、地元住民、そして大学が関わっており、今年度に関してはワークショップを地元メディアが大きく取り上げ、より広範に渡って産官民学の連携を実現することが出来た。ただ、ここで少し疑問なのは「リサーチ・コンソーシアムが指す企業とは何か？」ということである。一口に企業といっても規模や業態は様々である。したがって産官民学の連携というメッセージも、受け止める企業によって様々な解釈があろう。例えばリサーチ・コンソーシアムが連携を目指す企業に、中小企業はどの程度含まれているのだろうか。周知の通り、日本国内の99%以上の企業がいわゆる中小企業である。¹⁸業種によって中小企業の定義は多少異なるが、いずれにしても中小企業が日本経済の中で果たしている役割は大きい。確かに単体で見れば、中小企業が技術開発やイノベーションにかけられる資金は限られおり、世間を驚かせるような成果を上げることは難しいかもしれない。しかし、そうした中でも自社の経営力を高めようと地道な挑戦を続けている。白山麓実習プロジェクトが連携している都市公園の指定管理者、金沢庭材グループも同様である。小泉政権下で一気に進んだ民営化政策の一端が指定管理者制度であり、その流れに乗ろうとする企業、

¹⁷ 脚注4に同じ。

¹⁸ 中小企業庁 Web サイト <http://www.chusho.meti.go.jp/index.html> 2012.10.20 閲覧

あくまでも静観すべきとする企業、あえて流れに逆らう企業、様々あるが、中小企業にとってのこうした判断は常に挑戦であり、自社の命運を左右する（一つの判断にかかるリスクは大企業よりもはるかに大きい）。もちろん総合政策学部の学生は、こうした個々の事案ではなく、広く社会の課題を解決する政策立案、政策分析の手法を学ばなければならない。“Think Globally.”である。しかし同時に、社会は個々の企業や官公庁、一人一人の市民の小さな活動が重なり合って築かれていることも事実である。この小さな活動こそが“Act Locally.”であり、白山麓実習プロジェクトは、実在する中小企業が自社の命運をかけて活動する生の現場を学びのフィールドとしていることに価値がある。民営化だけでなく、企業の社会的責任という言葉も一般化し、今後はますます企業が担う公的な取り組みが増えていくだろう（中小企業にとっては大きなプレッシャーである）。これらの取り組みと緊密に関わり合う白山麓実習プロジェクトは、リサーチ・コンソーシアムの中にあっても、やはり貴重なモデルケースになり得るのではないだろうか。プロジェクトをコーディネートする者として、この点を心に刻み、使命感を持って実習生を引率していきたいと考えている。

最後に、来年度以降のプロジェクト活動に向けて、久野教授の退官に伴う新体制の構築に注力しなければならない。4年目を迎え、白山麓実習プロジェクトの卒業生も増えてきた。地元での認知度も向上している。可能であれば来春までに先述した支援団体発足に漕ぎ着けたい。大学生の活動は、時間的な制約や年度毎に人数も異なるため、一定のクオリティを常に保って実習を行うのは困難である。また、そのクオリティを押しつけられるものでもない。社会人と接するマナーや心構え、当事者意識について妥協するつもりはないが、準備を要する企画の成否は、プロジェクトに関わる時間や人数が多分に影響する。今年度は7名の4回生が活動したが、来年度は今のところ3名の4回生しかいない。昨年と同規模とはいえ、心配がないと言えば嘘になる。そういったことも含めて、いかにして白山麓実習プロジェクトを実習生にとって学び豊かなものにしていくか、また現地から変わらずに歓迎されるプロジェクトにしていくか、支援団体とも相談しながら効果的に対応していきたい。そして、今年度から深く関わることになった白山市観光推進部ジオパーク推進室や白山麓各支所の職員の皆さんには、改めて様々な場面でアドバイスを頂戴することになると考えている。プロジェクトとしても、筆者個人としても、これらの支援に精一杯応えられるよう努め、回を重ねるごとに関係主体間の絆を育む白山麓実習にしていく所存である。

おわりに

ーゼミ実習としての白山麓実習プロジェクトの意義と意味ー

関西学院大学 総合政策学部教授 久野武

私は本学にきた時から、ゼミでは人脈を生かして、全国の国立公園の自然保護官（いわゆるパークレンジャー）の指導の下でボランティア活動を行わせる実習（それを当初ボランティア＝実習と名付けた）を経験させようと決意していた。20代後半から30代はじめにかけて中部山岳国立公園平湯温泉（岐阜県）と霧島屋久国立公園（現・霧島錦江湾国立公園）、えびの高原（宮崎県）にパークレンジャー（当時は国立公園管理員という呼称だった）として駐在していたことがあるのだが、そのときボランティアの学生達を受け入れた経験があり、教育的効果は大きいと確信したからである。

その後、霞が関に転じ、レンジャー世界からは遠ざかった。

一方、世間が役所や役人を見る目は年々厳しくなってきた。さまざまな利権や天下り等々の問題である。環境庁はそういう意味では利権からは遠い比較的清潔な役所であったが、それでもマスコミの役所・役人への批判は、間違っていないが、どこかピンと外れたものを感じられ、いわば隔靴搔痒の感がして仕方がなかった。もちろん、役所や役人の世界への批判は必要である。だが、マスコミの役所批判はしばしば紋切り型で外在的批判に過ぎないと思われた。他方、学生諸君はメディアのいうことを簡単に受容する傾向がある。だからこそ、学生諸君には行政の現場の管理サイドに一度は身を置いて、その一端でも体験することが意味のある内在的批判への第一歩ではないかと感じたのである。今日ではインターンシップが当たり前になっているし、総合政策学部でも他学部で先駆けて夏休みを使ったインターンシップを取り入れていたが、私には私にしかできないインターンシップをゼミ生たちに経験させてやろうと思ったのである。つまり国立公園管理など環境に関する現場での管理サイドで現業的業務を体験し、環境に携わる人々の喜びと苦悩の一端を共有させるということである。

幸いにも私の目論見はあたった。ボランティア或いはインターンシップとして準備した10ほどのボランティア＝実習コースの大半は風光明媚な景勝の地で、自然が満喫できる。何よりも国立公園の現場に単なる観光で行くのではなく、管理サイドでいろんな手伝いをするという滅多にない経験ができるということが、ゼミ生たちの興味をひき、国立公園での合宿とともに、ゼミのいわば＜売り＞になった。

ただ、実習先の確保は容易ではない。実習生を受け入れても評価されるわけでないし、一週間程度の短期ボランティアであるから準備のほうが大変で、本当のボランティアは実習生受け入れ先の担当者になる。無料もしくは廉価で宿泊できる場所があることが条件になるが、そのために何らかの未使用のスペースを転用してまでボランティアを受け入れてくれた実習先には感謝の言葉もない。また行き先は山間部の僻地が多いだけに、どうしてもクルマ使用になりがちだし、受け入れ先もそれを条件にするところが多い。当然のことながらボランティア保険には入れるものの、万一の事故を考えると恐ろしい。それでもなんとかゼミ生たちのニーズを満たす程度の実習先は綱渡り的に確保できていたが限界が来た。2010年、あてにしていた受け入れ先のいくつかがダメになり、ピンチな状況になった。あわてて新たな受け入れ先をいろんな伝手で探し出したのである。

さて、野畠章吾氏は損害保険会社を辞したのち、㈱クロスクリエイティブコアの事業経営に従事しつつ、総合政策研究科を優秀な成績で修了した。修士論文は都市公園のマネジメントである。修了後も比較的自由に動ける立場にあり、私のゼミ指導を手伝ってくれていた。野畠氏は実習先探しに奔走する私の苦衷を察してくれ、彼の実家である石川県下で実習先を紹介してくれた。事業とつながりがある会社が指定管理者になっている都市公園「白山ろくテーマパーク」である。県の土木事務所の了解も取り付け、野畠氏が全行程

を引率・指導する形で実習はスタートした。ただ、この実習では、清掃などのボランティアだけではなく、都市公園活性化のための政策提案を考えさせ、最終日に発表させることにした。したがって他の実習コースと異なり、メンバーは事前にさまざまな調査や準備が必要であった。最終日に指定管理者、地元住民、県土木事務所などの前で実習生は政策提言を行い、意見交換したのだが、いくつかの提言のどれかを来年度試行すればどうかという意見がでた。

翌年、その政策提案の一つである幼児を対象にした『キッズすくすく園芸体験』を実施することになった。その過程で様々な試行錯誤があり、事前の調査や打ち合わせも再三であったが、白山市の協力も取り付けることができ『キッズすくすく園芸体験』は大成功に終わった。この時点でもはや「実習」でなく「プロジェクト」になったといってい良いだろう。引率、コーディネートをを行う野畠氏の献身的な奉仕があつてはじめて成立したプロジェクトだが、濃密な内容の分、ゼミ費からの助成だけでなく、外部資金の獲得が課題として挙げられた。かくて二年目は、実習そのものも大成功を収めることができたし、単に指定管理者だけでなく地元住民からも歓迎され、実習生の満足度も大きかった。そして、このときの意見交換会では「次年度はジオパークの普及啓発活動をしてくれないか」という意見がでた。

正直言って、ジオパークは「パーク」とはいえ、制度としては具体的な中身が全くないものといつて過言ではないのだが、白山市は1市2町5村合併の結果誕生した新設市であり、白山手取川ジオパークは単に誘客のための看板としてだけでなく、新しい市の統合のシンボルともなりうる。そういうことで白山市のジオパーク推進室は積極的であり、2012年度はジオパークの普及啓発を軸とした実習とすることが早くから決まった。

こうして、今年度いっぱい退職する私のゼミは4年生しかいないのであるが、ゼミ生外のメンバーも加わって今年度の白山麓実習プロジェクトはスタートした。白山市のジオパーク推進室は全面協力してくれて、白山市との協働事業とでもいふべきものになった。また関西学生と白山麓とをWeb上双方向で結ぶという活動も新たにはじまった。さらに、経費のことであるが、今年度新たにスタートした学部研究会の学生地域貢献事業にアプライし、助成を受けることができた。かくてこの白山麓実習プロジェクトは昨年以上の成功を収めることができたし、昨年の卒業生も全員が参集するなど、学生にとっても極めて意義深いプロジェクトであることが実証された。

久野ゼミの実習は管理サイドでの経験をさせることによって、さまざまな問題への管理サイドの対応とその抱える問題点を実感させるとともに現場で苦闘している職員の息遣いを肌で感じさせるというのが主たる狙いである。その中で白山麓実習は唯一地元自治体との協働と双方向での対話によって、地域活性化の試みを行おうとする実習というよりはやはり「プロジェクト」であり、その意義は大きい。もちろん、それは野畠氏の献身によって支えられたものであり、彼がいなくなれば、継続するのは直ちに困難に直面するのも否めない事実である。自然保護官事務所などでの私のゼミ実習は、私がレンジャー出身者であるという特異性によって成立したものであったが、白山麓実習プロジェクトの場合は野畠氏が石川県出身ということでいささかの縁があつたにせよ、白山市との密接な協働に至ったのは、べつに特別な人脈があつたわけではなく、野畠氏の指導とプロジェクトチームメンバーの真摯な努力が実を結んだといふべきであろう。そういう意味では、この白山麓実習プロジェクトの経験は、他のゼミでのフィールドワークの実施に際しても共有されるべき点が多々あると思われる。

なお、もう一つのユニークな実習がゼミから生まれている。ゼミ生を主体としたLINK・AsoというNGOによる阿蘇草原再生の自主実習である。ここでは毎年何らかの形で外部資金（現在は阿蘇草原再生協議会）を得てボランティア活動を行っている。ただ、実習の内容そのものは三つの牧野組合の作業の手伝いが主であり、内容そのものを毎年いちから考えるという白山麓実習プロジェクトとは異なるものである。

いずれにせよ私自身はいなくなるが、この白山麓実習プロジェクトを新たな形態で維持継続させることの意味は大きい。

謝辞

本報告書で述べた通り、2012年度白山麓実習も成功裏の内に終わることが出来ました。ご支援、ご協力を頂きました全ての方に心より感謝申し上げます。

白山市観光推進部ジオパーク推進室室長の山口隆様、次長の徳井孝一様、主事の日比野剛様、安田理恵様、町澄秋様には、3月からの長期に渡って多大なご支援を頂戴致しました。厚く御礼申し上げます。特に日比野様には下見はじめ事前協議のお電話にメールと随分長い時間を割いて頂いた上、ワークショップ参加者募集では大変なご苦勞をおかけ致しました。現在も実習生の卒業論文執筆にお付き合い頂いておりますこと、感謝の言葉もございません。今後のプロジェクト活動の中で少しでも恩返しできればと思っております。

白山市白峰支所産業建設課主査の山口昭恵様には、5月の下見でお会いした時より様々な情報提供を頂きました。ワークショップ当日にも、実習生に温かい声援とねぎらいの言葉をかけて頂きました。本当に有難うございました。また、白山市教育委員会白山ろく分室教育課課長補佐の今川浩様には、ワークショップ全行程でお付き合い頂き、子供たちと接する上での具体的なアドバイスを頂戴致しました。深く感謝申し上げます。

白山ろくテーマパークを所管する石川土木総合事務所の川井勝徳様には、実習初年度よりご助力、ご助言を賜っております。今年度の実習でも懇親会までご参加頂き、心より感謝申し上げます。また、石川県土木部公園緑地課課長の丸山隆史様をはじめ同課の皆様、ならびに石川土木総合事務所の皆様のご理解、ご協力に深く御礼申し上げます。

白山ろくテーマパークの指定管理を請け負う株式会社岸グリーンサービスの宮腰和美様、同公園所長の中村一彦様には、今年度も実習生を温かく迎えて頂きました。有難うございました。来年もまた皆様と公園で活動をさせて頂ければ大変嬉しく存じます。今後とも宜しくお願い申し上げます。公園スタッフの皆様にも宜しくお伝えくださいませ。

いつも白山ろくテーマパークで我々を情熱的に指導して下さいている小村茂様、島田鯛子様、西出一久様、今年度も大変お世話になりました。とりわけ島田様から頂いたハーフカレー、とても美味しかったです。卒業生や実習生とプライベートでも遊びに行きたいと思っておりますので、どうか今後ともお導き下さい。宜しくお願い申し上げます。

ボランティアとして駆け付けて下さった石川県明和特別支援学校の前川哲昭先生、株式会社金沢村田製作所の高橋徹さん、セーレン株式会社の西東祐樹さん、せっかくの休日にお付き合い頂き有難うございました。ワークショップにご協力頂いただけでなく、夜中まで実習生の色々な相談に乗って頂き、心から感謝致しております。

金沢庭材株式会社、株式会社クロス クリエイティブ コアの社員の皆さん、そして上田一治社長、お陰様で2012年度の実習も大きな成果をもって終わることが出来ました。食材提供や下準備はもちろんですが、皆さんからの支援があるからこそ、筆者は白山麓実習プロジェクトに心おきなく取り組むことが出来ます。深く感謝致します。

総合政策学部からは学生地域貢献活動等助成を頂きました。また白山麓実習プロジェクトにお力添えを頂いている同学部の先生方に、この場を借りて御礼を申し上げます。

実習生に向けて。もう一度ジオパーク推進室室長の山口隆様から頂いた「十年は続けて欲しい」というメッセージに触れます。十年という年月は長いですが、皆さんがプロジェクトで活動するのは一年ほどもです。十年とはいえ、一年一年の積み重ねです。先輩たちがそうであったように、皆さんも今年一年、来年一年と、与えられた時間、全力でプロジェクトに打ち込んで下さい。そして十年後、もう一度白山麓を訪れてみて下さい。もしかしたら何かプラスの方向に動き出しているかもしれません。そのきっかけに、少しでも“皆さんの一年”の努力が影響したのなら、それは素晴らしいことだと思います。それを信じて、これからも白山麓に関心を持ってもらえれば引率者冥利に尽きます。

最後に、本プロジェクトの遂行にあたり、筆者を全面的に信頼して下さい下さった久野武教授に心から感謝を申し上げます。

完